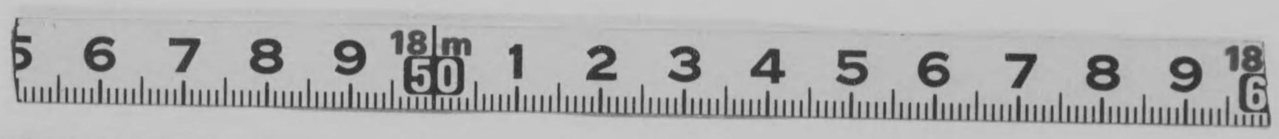
始点



收穫

土屋極東著

大正
4. 10. 6
内交

序

文運の進歩發達は駸々として一日も止むことなく、社會の實力競爭は益々激烈となつた。斯の如き時代に當つてその進歩に伴ひ、競爭に優勝の地位を占めようとするには、各自の境遇と性質とに應じ、立志發奮して知識の種子を我が心に植ゑつけ、絶えず耕耘に努力しなければならぬ。然らざれば他日有用なる人材たるべき、實力の收穫を得難いのである。

凡そ文明の競爭は、學問知識の有無多少によつて、その勝敗を決するのである。吾輩の教育を奬勵する所以のものも、亦こゝに根柢を置くので、國家の上より見るも、世界列强と比肩し、若くは之を凌駕するには、科學的の健全なる知識を有する國民を多數ならしめ、才學並に豐富なる人物を産出しなければならぬ。

極東土屋君は早稻田大學に於て、過去十年間一日の如く、親しく各種の學校に負笈し能はざる帝國十餘萬の青年をして、通信によつて學問知識の自修耕耘をなさしめ、その啓發培養宜しきを得て、頗る顯著なる效果を收めたのである。

今また常に此等知識の培養を希望せる青年に對し、明治大正の模範的人物、懇切なる教訓、趣味ある文藻及び社會の深奥なる機微に至る迄、數千の有益なる作物を刈り集め、之を收穫と題して公にしたのは、大に機宜を得たものと信ずる。

惟ふに現代の青年が、此收穫より智德を涵養し、實力を增進する種子を得、修養上幾分裨補することが出來たならば、それが土屋君の本懷とする所であらう。

大正乙卯仲秋　法學博士　高田早苗

凡例

一、明治天皇　今上天皇陛下の御治世　昭憲皇太后の御坤德、その他人物傳は、嘗て新紙等に公にせられたるものゝ中、最も正確なりと信ずるものを所依とし、尙ほ諸書をも參考とし、以て史實を誤らざるに力め、行文の如きも其まゝ改めざるものあり。

一、御即位大禮の期十一月は、恰も著者が早稻田大學に於て、校外生教育に從事せし以來、滿十年に相當するを以て、此十春秋その折々の見聞所感にして、多少修養に裨益すべしと信ずる小品數十種を選集し、之を悠紀主基の收穫に因み、記念として出版したるものなり。

一、本書にして若し幸ひに諸賢の歡迎する所となり、幾分たりともその利益を收むることを得ば、悉く之を獨學自修者の燈臺たり、社交機關たり、集會所たる一會館建設の基本に加へ、更に先輩及び大方の贊助を仰ぎ、著者多年の希望を實現せんことを期す。

自序

仰げば天高く氣清らかに、悠紀主基の齋田に稔つた、豐かなる垂穗の收穫は、千載一遇ともいふべき此秋に見らるゝ。それに因むといへば畏こけれど、我も國民の一人として大典を奉祝する眞心から、多年耕耘し來つた作物を刈り集め、之を記念の收穫としたのである。

明治時代を帝國文運の播種、挿秧、耕耘の期とすれば、大正の現代はその成果を刈り入れ、之を以て國を利し、

民を富ますべき收穫の秋といはねばならぬ。余が此著を收穫とした所以は、かゝる時期の意味からでもある。

明治天皇　昭憲皇太后　今上天皇陛下、維新の元勳をはじめ、明治大正に於ける代表的人物の傳もあれば、歴史上の事實もあり、思想上の變遷も錄してある。殊に早稲田の學園にゐて、見もし聞きもしたこと、我が心に映じた世界觀、人生觀の一端も之によつて窺はれよう。それから教訓となるべき談話も、修養上の心得も成功の暗示も、趣味の片影も、その他種々の作品を、此收穫の中に藏めたつもりである。

余は過去十年間早稲田學園の耕人となり、智德の穗を拾ひ集めては、之を紙に載せて普く國の内外に播き弘め、愍むべき不毛の地に迄開拓の道を講じては、その穗を植ゑ附け、絶えず培養に苦辛して來たのである。少くとも十數萬の青年は、既にその成熟せる稻から、新たな智德の實收があつたことを告げらるゝのを聞いて、自ら悅びに堪へないのである。乃ち學園の通信教育に從事せる十星霜の記念として、その積み上げた稻穗の中から、數十束の萃を選びとり、之を一の收穫と名けたのは强ち理由のないことではあるまい。

若し今後此の收穫からも、幾分人生に必要な滋養物が見出だされ、饑渇を醫するに足るべき、興奮劑が寄與せられたとすれば、そは肥沃なる學園の種子が良いからである。

大正四年九月二十三日滿月の夜　土屋極東

收穫目次

第一篇　人

一　明治天皇と昭憲皇太后……一頁
　明治天皇の鴻業—明治天皇の御文
　德—學生の力—昭憲皇太后
二　今上天皇陛下……三〇
　大正の治—無上の光榮
三　寛仁……四四
四　智勇の人……四六
　維新の三傑—切腹の恩命—征韓論
　—甲東と南洲—聖斷
五　大政治家……五五
　少壯時代の伊藤公—明治維新以後の公
六　至誠の人……六七
　乃木大將
七　首相大隈伯と其精力……七四
　大隈伯の輿望—偉大なる伯の精力
八　天成の司令官……八一
　東郷大將
九　重大なる責任……八四
　文相高田博士

十　恩師の半面……八七
十一　母校の中心人物……八九
十二　三寸の舌頭……九二
十三　實業界の重鎭……九五
　　澁澤男爵
十四　奮鬪的商人……九七
　　模範的實業家森村翁—森村翁の少時—翁の立志—兄弟同志協力—奮鬪時代—翁の三主義—翁の家庭
十五　天禀と出世……一一〇
十六　熱心と發明……一一三
十七　富豪の勞働……一一五

第二篇　教

一　人人人……一一七
二　自信と修養……一二一
三　進取と保守……一二四
四　早起の德……一二七
五　豐年を戒む……一二九
六　誤解を愼め……一三二
七　修養實話……一三五
　　苦心と熟達—平和と非常—武士道

三則—宰相の器量—運根鈍の用
八　是れでもか是れでもか……一四〇
九　假性睡眠……一四五
十　人心のバテイ……一四八
十一　雲雀の巢取……一五〇
十二　自敬の意義……一五四
十三　成功の第一歩……一五七

第三篇　文

一　國民讀本を讀む……一六一
二　一人子の入學……一六四
三　孔雀（新作謠曲）……一七三
四　溫交會……一七九
　　後樂園
五　富士登山……一八二
六　筆墨會……一九二
七　東洋無比の商店……一九七
　　三越吳服店
八　吹く風降る雪……二〇三
九　春のさゝやき……二一〇
十　大正四年の初旅……二一三
　　熱海溫泉

目次

十一　京阪とびあるき……二三七
準備—訪問—盛會—歸京
十二　悅びの顏……二三七
十三　和歌……二四四

第四篇　雜

一　菊花の話……二四七
二　鬼の話……二四八
三　笑ひ……二五四
四　屠蘇と雜煮……二五八
五　茶談……二六〇
六　海と山……二六四
七　電車の曲……二六五
八　自然の啓示……二六七
九　伯と語る……二七一
十　末廣の舞臺……二七四
十一　疑問標……二七八
十二　出世相撲……二八二

——《了》——

收穫

第一篇　人

土屋極東著

一　明治天皇と昭憲皇太后

明治天皇の鴻業

立太子　明治天皇は御諱を睦仁と申させ給ひ、孝明天皇第二の皇子、嘉永五年九月二十二日の降誕に御座す。後陽曆に改算して、十一月三日を以て天長の嘉節と定めらる。初め祐宮と申し奉り、御兄皇子早夭し給ひしにより、萬延元

年九月二十八日御齡九歳にして皇太子に立たせ給ふ。

大政奉還　慶應二年十二月廿五日、孝明天皇は内外形勢切迫の際、御志を齎らして崩御あらせらるゝや、越て三年正月九日天皇踐祚、時に御齡十六歳。皇考の遺志を紹せられ、雄藩を引き皇運の隆昌を圖り給ふ。十月十四日征夷大將軍德川慶喜大政返上を奏請す。十二月十日其請を允し、萬機の親裁を布告し、職制を更革し、維新宏謨の端を啓かせらる。

遷都　明治元年正月三日慶喜朝命に抗す。卽ち討幕の大號令を布かしめ、三月御親征として浪華に行幸あり、四月慶喜恭順江戸城を收めらる。閏四月京都還幸、續いて奥羽函館を征討せしめ、海内悉く平定す。七月江戸を東京と改め、九月臨幸十二月一旦京都に還幸ありて、二年三月更に東京に行幸、皇居を江戸城に定められ、六月諸藩の版籍奉還を允し、知藩事を置き、公卿大名の稱を廢し、之を華族と稱し、四年七月十四日に至り、廢藩置縣を斷行せられ、海内の統一を大成せらる。

卽位の大禮　萬機親裁を布告あらせらるゝや、明治元年三月十五日五個條の御誓文を以て神明に誓ひ、之を天下に頒ち、同時に維新の大詔を發せらる。皇謨の基是に於てか定まる。八月廿七日卽位の大典行はれ、九月八日改元あり、一世一元の制を定めさせらる。

國民の參政　朝廷には初め徵士參與あり、後公議所開かれ、次で左院と爲り、明治八年四月十四日立憲政體を立つべき宣明と同時に、元老院、大審院を置かれ、別に地方官會議を開かれ、國民の代表に擬せらる。續いて府縣會を開かしめ、漸次國民參政の準備を爲さしむ。又華族會館に臨幸あり、勅諭を降さしめ、憲政の方向を指導させらる。國民の政治思想漸く進むや、十四年十月十二日を以て、明治二十三年を期し、國會を開設すべきの勅諭を發し、國民の歸嚮する所を知らしむ。

憲法發布　十五年に伊藤參議を歐洲へ派遣され、十七年に制度取調局を宮中に置かせられ、華族の五爵を序づ。十八年太政官を廢し、內閣制を創められ、二十一年樞密院を設けられ、二十二年二月十一日を以つて帝國憲法を發布し、皇室典範を御制定ありて不磨の大典を宣明し、統治の洪範を明徵せられ、立憲政治の準備具さに備はる。

帝國議會　二十三年十一月第一回帝國議會召集され、立憲政體完く成る。

御仁德　明治天皇の御仁德はいやが上に高ければ、只其の一端を記し奉らんに、二年に淫雨ありて農を害すること大なりければ、供御を減じ、救に充つべき詔を發しさせ、五年に車駕親しく西國を巡幸し、民の疾苦を視給ふを始めとし、九年に奧羽、十一年に北陸、十三年に山梨三重京都、十四年に奧羽及び北海道、十八年に山陽道等御巡幸民情を視察し、民を恤み給ふことの深き、遂に地租改正となり、減租の詔となり、十年鹿兒島逆徒御征討あるに拘はらせられず、第一回內國勸業博覽會を開かせられ、車駕親臨して其の式を擧げ、民業を勸めさせらる。

御儉德　六年皇城炎上するや赤坂假皇居に御座すること十有餘年、御造營を速やかにするなからしめ、二十二年一月に至り新宮城に徙御せさせらる。後年施藥救療の資百五十萬圓を下賜させ、濟生會の基礎となさしめられし如き、御仁德の一端にして、御賑恤は年々月々行せられぬ時ぞなき。是等の御惠恤は、悉く御儉德の餘に出でさせ給ふこそ一層難有けれ。

刑律の改定　其の民を惠ませ給ふや、維新後直ちに刑律を改定せしめ、各刑律

を輕減統一させ、新律綱領より改定律例の刑法を、新刑法に漸次改めさせ、猶ほ民法を定め、商法其他の法典を具備せしめ給ふ。

教育交通　特に庶民の富盛に御心を注がせられ、其の路を鐵道に求め給ひ、五年京濱鐵道開始に親臨し給ひしより、各大線の開通親臨を忝うせざるなし。後年鐵道國有の規模茲に始まる。祭祀を愼み給ひ、教育に軫念あらせ給ふこと一方ならず。五年學制を定めさせ、其後教育令を布かれ、大學其他の開校及び卒業式等親臨して之を擧げしめられ、二十三年十月三十日には、教育勅語を下賜し、咸其德を一にせんことを冀ひ給へり。大戰役中及び其後も教育に關して、屢次御沙汰を下させられ、御勸奬ありたり。

國運の發展　特に日露戰役後國運の發展に關し、人心の歸嚮すべき所を示めさせられんとて戊申詔書を煥發し給ふ。教育勅語と共に國民服膺の二大誥たり。

和歌の御製　文事に於て國民を奬勵し給ふのみならず、御自から詞藻に富ませられ萬機の御暇に和歌の御製あり、其數八萬に達せられ、御製の傳はる毎に四民感激せざる無し。新年歌御會始めは、先朝の例に據らせらるると雖ども、臣民の詠進を許され、御前披講の榮を荷はしめらるゝは、御代の十二年より始まれり。

太陽曆　維新の皇謨を擴充し、多くの更革を斷行させられたるが、六年より太陰曆を廢し、太陽曆を行はせられし如きは、尤も著しき所とす。

海內皆兵　兵事は最も御心を盡し給ひし所、海內統一して五年徵兵令を布き、全國皆兵の義を行ひ、天皇の統帥を實にせらる。御自から武を修めさせられ、御乘馬の如きまで御堪能にあらせらる。七年には宮廷の用度を減じて軍費に充るの詔を發しさせられ、十五年には軍人に勅諭を下され、二十年には海防費補助の詔を發しさせ、二十六年には內廷の儲餘を下賜し、製艦費に充てしめらる。斯くの如くなれば陸軍も海軍も、漸次其の數を充實せり。又二十三年尾濃の間

に、陸海軍大演習を行はしめ、統監の勞を親し給ひしより、時々の大演習に親臨あらせられざる無し。

外國交際　外國交際は最も重しとし玉ひし所、登極の後直ちに外國公使を京都に御引見あり。海内統一を告ぐるや直ちに全權大使を派し、歐米諸國を巡訪せしめらる。

版圖の擴張　又琉球藩王の封冊あり。臺灣征討となり、遂に清國の交渉となり、平和の間に我が面目を保維して局を結び、八年朝鮮江華灣事件あるや、誘掖して修好條約を締結せしむ。日露間幕政時代より決定未了の樺太境界問題を斷せしめ、千島と交換條約を締せしめ、朝鮮處分の廷議乖離より來りし十年鹿兒島逆徒征討は、最も聖慮を勞せられたり。十二年琉球藩を廢し、沖繩縣を置かれ、版籍を正さる。朝鮮は十五年に我が公使館を燒き暴徒起りしが、仍ほ彼れを誘掖し、平和の極を結ばしめ、十七年更に事變あり、日清兩國兵衝突す。是亦平穩の局を結ばしめ、更に清國と天津條約を結ばしめ、共に朝鮮を扶掖せしめんとせらる。

日清戰役　然かも清國强ひて之を屬邦視し、我れに戰意を示し、遂ひに二十七八年の日清戰役となる。此時大纛を廣島に進め、親たしく軍事を統裁し給ふ。日清講和條約成るや、獨、露、佛三國の干涉あり、遂に畏くも遼東還附の詔を發せらる。然かも臺灣は帝國の版圖に歸し、總督府を置かせらる。

日露戰役　此時より朝鮮に於ける日露の接觸切となる。是より先二十四年露國皇太子(今の皇帝)大津御遭難あるや、京都に行幸親しく善後の勞を執り玉ふ。朝鮮には二十八年王妃事件あり、三十三年北清事件後日露間倍々切迫協定成らず、三十七八年の日露大戰役となる。此時大本營を宮中に置かれ、軍事を親し給ふ。皇軍連戰連勝遂に米國大統領の慫慂に依て平和成り、朝鮮及び滿洲に於ける優越權確定し、樺太の半部を回復す。

韓國併合　四十三年八月韓國を併合せられ、李王御優遇あり。而かして帝國の版圖未曾有の擴大を致せり。

日英同盟　國際上の改善せられしこと著るしく、二十七年には多年心を盡されし、條約改正先づ英國に成り、續いて各國と結了し、三十二年より實施せられ、法權を回復し、內地雜居を許され、四十四年に至り再改正を遂げしめ、稅權亦た回復さる。特に三十五年日英同盟成り再度改訂を經て效果著しく、以て今に至る。三十九年英帝特にガーター勳章を贈進さる。米と云ひ佛と云ひ、亦協商を存し、露に至つては協約を重ねて親善日に加はれり。

皇后皇太子　皇后宮は卽位の歲、卽ち十二月二十八日冊立宣下、十二年八月三十一日嘉仁親王御降誕、二十年八月三十一日儲君御治定、二十二年十一月三日立皇太子の御儀あり、四十五年七月三十日午前零時四十三分崩御あらせらるや、皇太子卽時登極、第百二十二代の皇祚彌々固し。

明治天皇の御文德

御文德　明治天皇の武道に長ぜさせらるゝは申すも畏し。御文德に至りては古今東西に冠絕あらせられ、敎化四海に普くして、如何なる僻陬の地にも咿唔の聲を聞かざるなし。我が邦今日の如き文明の域に進みたるは、是れ全く明治天皇の深く御文事を御奬勵あらせられたるに基く。而して萬機御親裁の御暇には、常に御心を敷島の道に寄せ給ひ、文武を兼ねいそしみ給ひ、一日の御製往往二三十首の多きは珍らしからず、されば御一代を通じての御製は、實に八萬有餘首に上らせられしと申す。故高崎正風男嘗ていひしことあり、古今、和歌の名人は多しと雖ども　陛下の右に出づるものなしと。洵に天皇の御製を拜誦するに、御着想雄大、詞藻絕倫、眞に帝王の御風格を具備し給ふ。日本臣民たるもの、天皇の御遺詠を拜誦するのみにても、其御文德の偉大なるを思ひ、明

治聖代が前古にその例なき發展を遂げたる所以をも知悉するに難からず。

和歌の御好尚　かくばかり明治天皇が和歌を好ませ給ひしは、實に御父孝明天皇の御性質を享けさせ給へるにもより、孝明天皇亦た常に和歌を愛で且つ斯道に長せさせ給ひ、御母英照皇太后にも御秀逸の御詠尠からずましませしより常に皇子（明治天皇を申す）を訓へ導き、御詠歌の事を御勸めあらせられき。されば豫ねて御孝心淺からざる皇子には、一に其御訓へを畏み、敷島の道に御心を寄せられて、凡そ七八歳の稚き御時より御題を申し請はれては、假名にて三十一文字を綴らせられ、御父陛下の御添删を請はれたりと申す。その頃より眞情流露の御作ありきと承はるだにゆかしき極みになむ。漸く長せさせ給ふに從ひ、冷泉卿、三條西卿等斯道の御指導を承はり、御詠口の次第に優れたまふと共に、いよ〳〵其御趣味を高めらるゝに至りぬ。

御歌所の設置　明治元年卽位の後諸般の制度を定め給へる中に、文學御用掛を置かれ、其内に特に御歌掛と云ふを設く、三條西季知卿同掛たり。後改めて御歌掛を侍從職に移さる。而して明治二年より毎年皇族、並に在朝の有位有爵者、及び高給女官等の詠歌を徵せられ、且つ斯道を御奬勵あらせ給ひしが、明治六年故高崎正風男三條西卿に代つて同掛たり。其翌七年頃より毎新年民間の詠進をも御嘉納あらせらるゝことゝなり、明治十九年には御歌所を設けられ、同時に從來の御歌掛を廢させらる。故高崎正風男續いて所長を拜命せしが、明治三十年十月三十一日、更に御歌所官制を定められ、所長一人、主事一人、錄事六人の外、名譽職として寄人參候十數名を置かせられ、以て今日に及びぬ。

主なる御製　御製中世に傳へられたる重なるもの數十首を左に謹記すべし。

先づ「大御心」に就ては

あさみどりすみわたりたる大空のひろきをおのがこゝろともかな

わがこゝろいたらぬくまのなくもがなこのよをてらす月のごとくに

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきはこゝろなりけり

大御心は常に世界萬國に注がせ給ひて、日露戰爭起りぬるときには、

四方の海みなはらからと思ふ世になど浪風のたちさわぐらむ

世界の平和に歸するを御覽ぜられて、

よろこびないひかはしつゝ國々のをさまる時にあふぞうれしき

沖津波より來るふねもとし〳〵に數そふ世こそたのしかりけれ

常に皇祖皇宗を尊崇し、諸神を敬し、國を思召さるゝこと止み給ふこと無し。

とこしへに民やすかれといのるなるわがよをまもれ伊勢の大神

うけつぎし國の柱のうごきなくさかゆる代々をなほ祈るかな

わがこゝろ及ばぬ國の果までもよろひる神はまもりますらむ

かみつよのみよのおきてをたがへじとおもふぞおのがれがひなりける

あしはらのみつほの國のよろづよもみだれぬ道は神ぞひらきし

最も大政に御勵精あらせられたるは、

政事いでゝきくまは斯くばかりあつき日なりと思はざりしを

夏の夜もねさめがちにぞあかしけるよのため思ふこと多くして

と遊ばされしにても拜察せらる。其の國民を思念し給ふこと日露戰役に、

くにたみは一つ心に守りけりとほつみおやの神の教を

ちはやぶる神の心にかなふらむわが國民のつくす誠は

こらはみないくさのにはにいでゝはて〻翁やひとり山田もるらむ

國民の力のかぎり盡すこそわが日の本のかためなりけれ

千よろづの民と偕にも樂しむにますたのしみはあらじとぞ思ふ

猶ほ民情を酌み給ふことの深きは、

しづのをがひとりひきゆく小車の重荷の上につもるゆきかな

賤が家の軒端に高くつみ上げしにひ藁白く霜ふりにけり

窓のうちに扇とりてもあつき日に照る日をうけて小草かる見ゆ
おも荷ひく車のおとぞ聞えけるて日のあつさたへ難き日に

文明の開け行くを嘉賞し給ふには、

いなづまをひきし火かげもみゆるかなあがたのさともとしにひらけて
天のしたにぎはふよこそたのしけれやまのおくまでみちのひらけて

人物を求め給ふこと亦た深くましますは、

山のおく島のはてまで尋ねみむ世にしられざる人もありやと

去れば適材を適所に得給ひける結果は、

空蟬の世はやすらかにをさまりぬ我をたすくる臣のちからに
あがたもり心つくしのほど見えてわらやのけふりたちまさりけり

と遊ばさるゝに至りぬ。且つ猶ほも功臣及び殉難の臣を思召さるゝことは、

よとともにかたり傳へよ國の爲いのちを捨てし人のいさをを
かぎりなき代にのこさむと國の爲たふれし人の名をぞとゞむる
をりゝにおもひぞいづる國の爲心くだきし人のむかしを

其の根本たる教育に御心を注がせ給ひて、

いつくしとめでの餘りに撫子の庭の教へをゆるがせにすな
たらちねの庭の教はせばけれど廣き世にたつ基とはなれ
世の中のひとにおくれを取りぬべしすゝまむ時にすゝまざりせば
すゝみたる世にうまれたるうなゐにもむかしのことをまづをしへなむ
今はとてまなびの道におこたるなゆるしのふみを得たるわらはべ

大御心は學校卒業生にまで注がせ給へるなり、小兒の純粹なるは特に大御心に かなひて、

思ふことつくらふ事もまだ知らぬをさなごゝろのうつくしきかな

勤勉忍耐は自から具足し給ひければにや、

雨だりにくぼみし軒の石みてもかたきわざとて思ひすてめや
とる掉のこゝろながくも漕ぎ寄せむあしまの小舟さはりありとも

又油斷を戒しめ給ふこと一ならざる中に、

勝鬪の響につけてむら肝の心たゆむなわが軍人

尙武は登極の初めより、大御心を注がせらる。

身にはよしはかすなりてもつるぎたちときなわすれそやまとごゝろを
ますらをに旗をさづけて思ふかな日の本の名をかゞやかすべく
大八島守らむふれの年々にかすそふ世こそうれしかりけれ

最後に教育に關するもの數首を拜記すべし。

いさをある人を教の親にしておほしたてなむ大和撫子
進みたる世に生れたるうなゐにも昔しの事をまづ教へなむ
正しくも生ひ繁らせよ教草男女の道をわかちて

ともすればあらぬ方にと踏迷ひ教へがたきは人の道なり

畢生の力

明治天皇の叡明絶倫に在しゝことは、右の如く普く國民の知悉する所である。然るに御在世の折發表せられなかつた、副島伯爵家秘藏の御宸翰が、崩御の後公にせられた。余は之を拜誦して　明治天皇の國民に學術を御奬勵あらせられた許りでなく、　天皇自ら御學問に大御心を注がせられ、所謂自彊自修の御精神に富ませられた事を拜して、益々感激措く所を知らぬのである。卽ち副島侍講に賜はりたる御宸翰全文は左の通りである。

卿ハ復古ノ功臣ナルヲ以テ、朕今ニ至テ猶其功ヲ忘レズ。故ニ卿ヲ侍講ノ職ニ登庸シ、以テ朕ノ德義ヲ磨クコトアラントス。然ルニ卿ガ道ヲ講ズル日猶淺クシテ、朕未ダ其教ヲ學ブコト能ハズ。比日來卿病蓐ニ在テ、久ク進講

ヲ缺ク、仄ニ聞ク卿侍講ノ職ヲ辭シ、去テ山林ニ入ントス、朕之ヲ聞テ愕然ニ堪ヘズ、卿何ヲ以テ此ニ至ルヤ。朕道ヲ聞キ學ヲ勉ム豈一二年ニ止マランヤ、將ニ畢生ノ力ヲ竭サントス。卿亦宜ク朕ヲ誨ヘテ倦ムコト勿ルベシ。職ヲ辭シ、山ニ入ルガ如キハ、朕肯テ許サヾル所ナリ。更ニ望ム、時々講說、朕ヲ賛ケテ、晩成ヲ遂ゲシメヨ。

時は明治十三年のこと、侍講副島種臣卿が、或事情の爲め身の不肖を思ひ、恐懼に堪へずといふので、骸骨を乞ひ山林に世を避けようと、辭意を德大寺宮内卿に漏し、爾來御所の出仕を缺いて居た。その時畏くも天皇は御歳三十の御壯年に御座し、副島卿を補導の師と仰がせ給ふこととて、忠勤精勵の卿が、不圖出仕を怠り進講を缺くに至つたのを怪ませ給ひ、宮内卿を召して其故を訊ねさせられた。宮内卿恐懼措く處を知らず、即ち辭意ある旨を奏せしに、畏れ多くも、天皇宸襟を惱まし給ふこと大方ならず、諭して辭意を飜へさせよとの叡慮より、即時親しく宸翰をものせられたのが、即ち右拜寫した御宸翰である。その時遽に侍輔土方久元卿を召し、副島卿に仰せ聞けらるべき口頭詞と宸翰を傳へられ、且能く諭すべきを宣べさせられた。内勅を奉じた土方卿は、今は一刻も猶豫すべきでないと、急ぎ汗馬に鞭をあげ、青山御所を驅け出て、雨の夕の都大路を縫ひ、騎馬を逸めつゝ、その頃副島卿の寓であつた、越前堀の鍋島侯別邸に走せ向ひ、遂に之を卿に傳へた。卿は此優渥なる御諚に接し、感激極まりなく、翌朝より病を排して出仕し、爾來閣臣に列するまで渾身の誠忠を致し、恪勤啓沃の大任を努めたとのことである。

一天萬乘の君を以て師に對する御情誼のいと厚きと、學問に勉めさせらるる御見識の彌高きとは、眞に我等臣民の醇厚の俗を實行の上に敎訓あらせられたものと深く銘し、之を拜誦するだに感涙に咽ぶのである。

昭憲皇太后

國民の教化　博愛仁慈坤德いや高く、明治維新の鴻業を內助あらせられたる昭憲皇太后には、大正三年三月來假初の御いたづきに渡らせられ、六千萬臣民の赤誠を披瀝して、御回春の期を熱禱し奉れる甲斐もなく、明治天皇の御登遐後、未だ二周年ならざる、同年四月十一日午前二時十分、春風に散る櫻花を名殘りとして、青山の大宮所に神隱れし給ひぬ。皇太后は夙に國風農桑等の勸奬に御心を注がせられ、又特に慈善救恤に御力を盡させられたるのみならず、金剛石の御詠をはじめ、三萬首に餘れる御歌によりて、國民の教化に多大の光被ありし御功績は、之を仰ぐにその窮まる所を知らず。

多事なりし御一生　昭憲皇太后は御名を美子と申し、從一位贈左大臣一條忠香公の御三女におはします。嘉永三年戊五月二十八日卽ち陰曆四月十七日京都一條烏丸の御邸に御誕生、御母君は故伏見宮邦家親王御息女松壽院准子と申す。明治元年十二月廿八日御年十九歲にて入內、卽日明治天皇の皇后宮に立たせたまひ、同二年十月五日東京行啓を仰出され、同二十四日東京皇居に御着あり。爾來國家多事なりし時も明治天皇の聖德に配し、仁慈の坤德洽く內外に施かれ、明治二十七年三月九日には、先帝陛下と共に大婚滿廿五年の盛典を擧げさせられ、國民萬衆齊しく家庭淑風の模範と仰ぎ奉りたり。明治四十三年五月二十八日には、還曆の御誕辰として萬衆皆祝典を謳歌し奉りたるが、越えて三年、明治四十五年七月三十日、明治天皇神去りたまひしなり。此日今上陛下踐祚、皇后宮は皇太后宮に宣

らせられたり。

御幼時の御修養　皇太后の御同胞は御兄君故從一位右大臣實良公、御姉君千代姫（毫攝寺門跡へ入嫁）同多百姫（舊大和郡山藩主柳澤保申の室）、奈良麿の御四方なり。皇太后の御幼名は富貴姫と申され、後壽榮姫と改められ、入内後美子と稱へさせられしなり。御父忠香公は御子達の庭訓かりそめにもし給はず、嚴かなる敎への中に努めて下情に通せしめんと計らはれたるが、猶皇太后には御稽古の中和學は御父君自らし給ひし上に、伏見宮諸大夫若江修理大輔菅原量長の女薫子、飛鳥井卿、近衛關白忠熙公等の御指南あり。御手蹟は倉橋大藏卿、安部泰聰に、後には有栖川熾仁親王の御手にならひ給ひしとか、漢學は初め久我家内人小島宇右衞門永秀の妹隆子といへるに四書五經を、後貫名海屋の子正祈に更に又其後若井某を召されて蘊奥を極め給ひきとぞ。庭訓すでに斯の如きに天禀の御才德秀でさせ給ふが上に、學を好ませ給ふ事とて、早くも古今内外に亘りて通曉し給はぬはなき迄となりぬ。御入内後も岩倉具集の女、智矩院洗子、後に稅所敦子、次に小池道子とつぎ〳〵に召されて、讀書習字和歌の御對手とし給ひたり。

御入内後の御貞德　慶應三年五月十八日は禁裡より御使ひあり、女御御内定の儀仰せ出され、同年六月廿七日初御目見えの御參内、續いて同廿八日勅使下りて御決定の御沙汰あり。翌年御入内の御事とはなり給ひしなり。是より先き御父君には皇太后御十四歳の時薨去あり、夫よりは御兄君實良公を御父君とも思召されしとぞ。而して明治天皇御在世の日には、毎朝七時前後には御起床、御化粧御着服調はせられなば、主上陛下と御朝餉に向はせられ、午前中に拜謁を願ひ出でし者には、外國使臣ならば桐の間にて、各皇族方ならば内謁見所にて謁を賜ひ、然なき日には御内廷にて何くれと御用を辨じ給ふ、御晝餐後は御内苑に御運動ありて後、御座所にて御詠歌など遊ばされ、御夜食後には主上

陛下と御對談あらせられ、女官等の詠歌の御評抔あり、十一時頃御寢に就かせ給ふを例とし給ひしが、御一方にならせ給ひしよりは朝の御拜終らせられて、終日御詠歌御讀書等に親しませ給ひ、夜は十時に必ず御寢所に入らせられしと承はる。先帝陛下が曾て日清の戰役大纛を廣島に移させ給ひし時も種々御心盡しあり、御手づから御衣縫はせて送り奉りし事もありしと、苟且の事に至る迄、主上を想はせ給ひたる御行爲げに尊くも畏し。

御仁愛と御性格　仰ぎても俯しても、げに極みなきは御仁慈の程にこそ。病者を劬はり、貧しきを恤はし、傷めるを憂ひ、災厄に罹りしを愍れみ、御手許金に、親しき御慰問に渥き思召の程は人として感泣せざるはなき程なり。嘗ては敵國の捕はれ人にさへ「祖國の爲に力を致し、者よく憐れみとらせよ」との御諚に、義手足を下されしさへあり、傷病兵の爲に御織手をのべ繃帶を卷かれて赤十字の事業を勵まし、愛國婦人會には御沙汰と、御下賜金に癈兵遺族を慰め給ひけるなどは下々に至る迄治く知る所なり。皇太后の御婦德を完備したまひたる次第は、明治天皇の宏謨を内助したまへる御生涯に明なるが、嘗て土方伯が、侍補役として大奥に參入し、歷代聖天子の御事蹟又は忠臣孝子の傳記を御說話申上げたる時、皇太后には御目に涙を催して感動あらせられしことあり。總じて最も歷史談を好ませられ。偉人傑士の人格事蹟は殊に興味を以て聽かせられたり。平常の御擧動極めて謹嚴にあらせられ、曾て御病床を起ちて宮内大臣を引見せられ、國務の大臣を遇するには少し位の病氣は押しても、その禮を盡さねばならぬと仰せられたりきと。

御文德と御歌　皇太后の御文德は特に御歌に著し、御入内の後、歌道書道を有栖川宮熾仁親王、近衞公に學ばせられし外、三條季知卿にも御歌を拜見仰せつけられ、なほ當時の侍講元田永孚、福羽美靜の講義をも御聽きになりたり。高崎男が御歌拜見になりし最初は、明治十一年なり。更に文學和歌にわたりて御

下問を受けし人人には、税所敦子、下田歌子、小池道子等あり。當時先帝より毎日御題ありて、その内には隨分難かしきものもありしが、皇太后には、悉く立派に詠ませられたり。高崎男が明治四十四年の地久節までに拜見したる御歌は實に四萬四五千首の多きに上りたりと。皇太后の御書蹟は、近衛家にて名高き上代樣書道の第一人、家熙公（寛文六年生元文元年薨去）の書を習はせられて、家熙公の眞筆のまゝとも申すべき眞を得たまひ、月々の御兼題にも、御自筆に御書きありたり。しかも葉山に沼津に御避暑御避寒の折にも、廢したまへる御事無く、年初の御歌會始め御詠進は、明治二年以來一度も缺かせられざりしなり。后太皇の御歌は何れも日々拜誦して箴となるものゝみにて、殊に「金剛石」、「水は器」の御歌の如きは、學びの窓に在る者の、常に拜誦する處なるが、茲に謹載して陛下の深き思召の程を偲び奉らん。

金剛石

金剛石も磨かずば、玉の光りは添はざらん、人も學びて後にこそ、まことの德はあらはるれ。

時計の針の絶間なく、廻るが如く時の間の、日暮惜みて勵みなば、如何なる業かならざらん。

水は器

水は器に從ひて、其の樣々になりぬなり、人は交る友に依り、善きに惡しきに移るなり。

おのれに優る善き友を、選び求めてもろ共に、心の駒に鞭うちて、學びの道に進めかし。

この「金剛石」、「水は器」の御歌は、學びの道に進む民草に敎へを垂れ給うたのであるが　皇太后御幼時の御勉學は、恐れ多きことながら、以上二首の御歌の御心を以つて學びの道に勤み給ひし御事と恐察し奉る。

事にふれ身はいかさまに下れども心はゆたになすよしもがな

奥ふかきみちにも入らむ物ごとの始めをはりの亂れざりせば

二　今上天皇陛下

大正の治

今上天皇陛下は、御諱神武天皇より第百二十二代の皇位に卽かせられたるを嘉仁と申し、明治十二年八月三十一日を以て御降誕あらせらる。九月六日御命名式あり、明宮と稱し奉る。十三年三月二十八日始めて賢所へ御參拜、爾來麹町區有樂町中山邸に御座まし、十八年三月二十三日青山御所へ移らせられ、二十年八月三十一日第八回御誕辰に於て儲君に御治定、九月十九日學習院へ御降學、御學問に達せられ、御記憶特に長じ給へり。二十一年八月には箱根塔澤に初めての行啓あり、二十二年二月二十三日赤坂離宮花御殿へ徙御同月熱海行啓、七月興津行啓、同年十一月三日皇太子に立たせられ、壺切の御劍を承けさせらる。同日陸軍歩兵少尉に任ぜられ、近衞第三聯隊附に補せらる。又大勳位に敍せられ、菊花大綬章を授かり給ふ。

二十五年十一月三日陸軍歩兵中尉に進み給ひ二十七年八月二十日學習院御降學を停められ、侍講を花御殿に召して御修學あり、二十八年一月四日陸軍歩兵大尉に進ませられ、三十年八月三十一日第十九回の御誕辰を以て、皇室典範の規定に依り成年に達せられ、貴族院の議席を有し給ふ。三十一年十一月三日、陸軍歩兵少佐に進ませられ、同時に海軍少佐に任ぜらる。三十二年八月三十一日近衞師團司令部附、常備艦隊附に補せられ、後陸軍參謀本部附、海軍々令部附とならせらる。三十三年二

月十一日勳一等九條節子姫と御婚約あり、五月十日御成婚同日菊花章頸飾を授り給ふ。

三十四年四月二十九日迪宮御降誕あり、同年十一月三日陸海軍中佐に進ませらる。東宮にましまして御見學の爲め地方巡啓あらせられしこと、鶴駕の輙なき地方無し。三十五年五月東北行啓あらせられ、其他は一々記し奉らんもくだくしければ略しつ。六月二十五日淳宮御誕生三十六年十月關西行啓あり、同年十一月三日陸海軍大佐に進ませられ、三十七八年戰役には或は大本營の議に參し給ひ、或は令旨を下され戰功を嘉賞せられ、或は御使を差遣され、御慰問を努めさせられ、親しく戰場に臨ませられんとの御志ありしも、事情許し奉らざりしにより御見合せとなりたることを拜承したり。

三十八年一月三日光宮御誕生、十一月には伊勢十二月には吳に行啓、三十九年十月參謀旅行演習行啓、十一月三日陸海軍少將に進ませられ、四十年十月には特に韓國へ行啓、韓國帝室御訪問あり、四十二年十一月三日陸海軍中將に進ませらる。

四十四年七月三十日先帝崩御に引續き、同日午前一時宮中賢所に於て踐祚式を行はせられ、同時に皇靈殿、神殿に於て劒璽渡御の御儀を行はせられ又同時に皇太子妃節子殿下には皇后に冊立せられ、廸宮裕仁親王殿下には、同日より皇太子殿下とならせられたり。

七月三十日樞密院に諮詢あらせられ、元號を大正と改めて左の詔書を降し給ふ。

朕菲德ヲ以テ大統ヲ承ケ祖宗ノ靈ニ告ゲテ萬機ノ政ヲ行フ茲ニ

先帝ノ定制ニ遵ヒ明治四十五年七月三十日以後ヲ改メテ大正元年ト爲ス主者施行セヨ

御名御璽　明治四十五年七月三十日

各大臣副署

天皇皇后兩陛下には、大正元年七月三十一日午前十時より、宮中正殿に於て踐祚朝見式を行はせられ、大勳位、親任官以下有爵者に謁を賜ひ、文武百官最敬禮中に　天皇陛下より勅語を賜ひ、各大臣御前に參進して奉答を爲し、以て朝見の式を終らせられたり。左に勅語の全文を拜記せん。

勅語

朕俄ニ大喪ニ遭ヒ哀痛極リ罔シ但ダ皇位一日モ曠クスベカラズ國政須臾モ廢スベカラザルヲ以テ朕ハ茲ニ踐祚ノ式ヲ行ヘリ。顧フニ先帝叡明ノ資ヲ以テ維新ノ運ニ膺リ萬機ノ政ヲ親ラシ內治ヲ振刷シ外交ヲ伸張シ大憲ヲ制シテ祖訓ヲ昭ニシ典禮ヲ須テ蒼生ヲ撫ス文敎茲ニ敷キ武備ヲ整ヒ庶績咸熙リ國威維揚ル其ノ盛德鴻業萬民具ニ仰ギ列邦共ニ視ル寔ニ前古未ダ曾テ有ラザル所ナリ

朕今萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ統治ノ大權ヲ繼承ス祖宗ノ宏謨ニ遵ヒ憲法ノ條章ニ由リ之レガ行使ヲ愆ルコト無ク以テ先帝ノ遺業ヲ失墜セザランコトヲ期ス有司須ラク先帝ニ盡シタル所ヲ以テ朕ニ事ヘ臣民亦和衷共同シテ忠誠ヲ致スベシ爾等克ク朕ガ意ヲ體シ朕ガ事ヲ奬順セヨ

同日陸海軍人には勅諭を賜はりたり。

天皇陛下には大正三年三月十六日の日曜に當り、三島老博士を御前に召され、大學の進講を聞し召され、帝道の學を御研鑽遊ばされしが、二十三日も亦日曜日なるに拘らず、午前十時老博士を青山離宮御學問所に召され、孟子拔萃の進講を聞し召して王覇の道を究めさせ給ひ、老博士は午前十一時半頃離宮を退出したりと、陛下が至尊の御身を以て古聖賢の道を繹ね御研學遊ばさるゝ大御心

を拜し奉りては、誰か感佩し奉らざらん。

今上陛下の御降誕は、八月三十一日に當らせらるゝも、炎暑の折柄當日宮中にては午前八時より、賢所神殿に於て天長節祭のみを行はせられ、更に十月三十一日の秋冷の季を以て御祝日と定めさせられ、豐明殿に於ける御祝宴、及び臣民の拜賀、青山練兵場に於ける觀兵式は、同日を以て行はせらるゝ事となり、大正三年七月十八日の官報を以て、右に關する勅令及宮内省告示を公布されたり。

皇太后陛下には大正三年十一月以來沼津御用邸に寒を避け給ひ、慢性氣管支加答兒に腎臟炎の御疾患ありし外、御健に渡らせられけるが、三月二十六日突然御異例に趣かせられ、四月一日頃より愈〻御病革まりしかば宸襟を惱ましさせられ、一日も速かに御回春を禱り奉りたる甲斐もなく、十一日午前二時十分遂に崩御あらせられたり。かくて御大喪に引續き諒闇中とて御即位の大典は大正四年の秋季を以て擧行あらせらるゝことゝなれり。

此時宮中府中の大改革あり、四月九日波多野敬直男を宮相に親任あらせられ、四月十六日内閣更迭あり、大隈重信伯をして新内閣を組織せしめられ、御親任式を行はせらる。それより各省地方官の更迭もありて、政治上の面目を一新せり。又同月二十三日大山巖公爵を内大臣に親任の式を行はせられたり。

皇太后陛下の御斂葬は、五月二十四日、二十五日、二十六日の三日間に亙り、代々木葬場殿、及び伏見桃山御陵所に於て御擧行あらせられ、御追號は昭憲皇太后と、仰出されたり。

天皇陛下には大正三年六七月日曜日毎に午前九時三十分宮内省御用掛文學博士三島毅氏を召され、經學の講義を御聽取あり、尙漢詩の御近作拜見仰せ付けられ、博士は一々意見を言上し、陛下には御機嫌麗しく、正午頃漸く入御遊ばさるる由にて、暑中に於ても御政務の間に御講學あらせらるると洩れ承はれ

るが、我等臣民たる者は、此有り難き聖德を奉體し勤勉せざるべからず。

天皇皇后兩陛下には大隈首相の奉請に依り、八月十五日東京に還幸啓あらせられ、同日午後元老元帥各大臣等參内、時局卽ち世界大戰亂に關する問題につき御前會議を開かせられ、その結果、獨逸に對し最後通牒を發し、同時に陸海軍に對し青島及び南洋獨逸領に大活動を開始すべき大命を發せられたり。

大元帥陛下には、日獨開戰以來殆ど日曜の御休養をも廢させ給ひ、日々表御座所に出御あり、軍機を鬱なはせられ、忠勇無雙の我軍が機敏の活動振り、殊に飛行隊の冒險的偵察、上陸軍の要地占領等に關しては、非常に御滿足に思召され、時々參内せる岡陸相、八代海相より軍事上重大要件の奏上を聞し召され、我軍が着々成功を收めつゝある事を御嘉賞あり、且つ種々御奬勵の御諚を賜はりし由承はれり。又陛下には軍國多端の際、出征軍人の勞苦を思召され、「民と苦を共にす」との有り難き御趣意にて、御樂に屬する事は一切却けられ、日頃最も御嗜好深き御煙草さへも、著しく御節減遊ばされしとは畏しとも畏し。尙ほ陛下には侍從武官を戰地に差遣され、親しく遠征將士を慰問遊ばさせられたり。

天皇陛下には大正三年十一月三日午前陸海軍兩大臣を御前に召させられ、帝國在鄕軍人會に對し、勅語を賜ひ、併せて御内帑金十萬圓御下賜の御沙汰あり。同月十三日御發輦大阪大本營に行幸、十五日より十八日迄四日間特別大演習御統裁あらせられたり。

十月三十一日天長節祝日の佳辰を卜し、我青島攻圍軍が一齊に砲擊前進したる威力により、流石獨軍の難攻不落と賴みし青島要塞も、十一月七日午前七時に至り、確實にモルトケ、ビスマルク及びイルチス山の諸砲臺を占領せり。敵は午前七時より同七時三十分に亙り、同時天文臺上及び海岸砲臺に白旗を揭げ、午前九時二十分軍使を以て我に開城を申込めり。依て午後四時モルトケバ

ラックに於て開城規約を締結せり。次で我が全權委員陸軍少將山梨半造氏、竝に海軍少佐高橋壽太郎氏は敵の全權委員ザックセル大佐との間に、開城規約を締結し、獨逸軍は全部我が要求を容れたり。

それより我軍は豫定の如く、十一月十六日午前九時より歩武堂々青島に入城し、後幾許もなく陸海軍の凱旋するや、國民は盛大なる歡迎式を擧げ、東洋に於ける交通貿易の安全を確保することを得たり。

大正四年秋冬の交を以て行はせらるべき卽位大禮の期日は、四月十九日午前九時三十分より、賢所皇靈殿神殿に於ける御奉告祭御終了と共に官報號外無號告示（各國務大臣宮內大臣副署）を以て左の通り發表されたり。

卽位ノ禮及大嘗祭ノ期日左ノ通リ定メラル。

卽位ノ禮　大正四年十一月十日

大嘗祭　同　年同月十四日

大正四年四月十九日

又久しく重大問題となりつゝありし日支間交渉に對し、我が帝國政府は大正四年五月六日を以て、最後の元老大臣會議を開き、支那に對する提案に就て愼重審議する所あり。それより御前會議を開き、翌六日午後支那に最後の通牒を發したるに、袁總統は八日各參政を集めて特別會議を開けり。而して此會議の結果、支那は日本が平和を愛する精神を尊重し、我が最後通牒全部を承認すべき旨の正式回答文書を、九日陸支那政府外交總長より、我日置公使に交付し、新條約締結調印は五月下旬を以て、兩國委員間になされたり。尙ほ我最後要求案の要項は、第一、山東省に關する件、第二、南滿洲に關する件、第三、東蒙古に關する件、第四、漢冶萍に關する件、第五、不割讓に關する件、第六、福建省に關する件等なり。斯の如くにして大正の日本は東洋平和の實を擧ぐることを得たるは、是れ皇威の極りなきと、國民の忠誠の致す所に外ならず。

無上の光榮

明治四十五年五月十七日今上天皇陛下の皇太子殿下にて在す時、早稲田大學に行啓あらせられた。余はこの際早稲田大學の職員として、畏くも奉迎送の榮を忝うし陛下の御仁慈御謙德、御好學に感佩せざるを得なかつた。我等が大隈伯爵邸前に奉迎の折、陛下は鄭重なる擧手の禮を遊ばされた許りでなく、門に入る時御馬車が一轉して我等職員を背後にせらるや、陛下には御氣遣ひあらせられ、御機嫌麗しき玉顏を後方に向けさせられたる御謙德、先づ難有く拜したのである。

それから陛下が大學の廣庭に、大隈伯を先導として玉歩を移させられた時、余は陛下を僅に數歩の間に拜し奉ることを得た。此時程余は心に嬉く感じたことは未だ嘗てない。將來の大元帥におはします殿下を、かく近く拜し奉る光榮、殆ど拜謁を仰せ付けられたると、事實に於て同じいと感じたからである。これ併しながら陛下の我等臣民に親ませらるる御仁慈、優渥なる御心より出でたるに外ならぬ。

陛下の總長大隈伯に先導せられて、校庭の大石壇に登らせらるゝにも、伯の隻脚にて歩行に不自由なるを御氣づかひあらせられ、時々伯の脚下に御注目ありたるは、陛下が老伯の國家に盡した過去の勳功ある歴史を、御心の中に讀み出され給ひしとも拜され、いとゞ畏く尊き念に打たれたのである。

同日四時に御還啓の御豫定が五時となつた。こは陛下御好學の御思召により、浮田、坪内、天野等、諸博士の學生に對する講義を、一々御巡視あらせらるゝ御熱心のあまり、圖らず時を移させられたとのことで、陛下は學生の講義筆記をも御覽あらせられ、その敏速なるに御心をとめさせられたと某博士より傳へ聞いたが、學生も無上の光榮と云はねばならぬ。その時、陛下の御手植ありし

月桂樹は、今も此の後も長へにいや榮え、學園の記念すべき寶樹として、人格養成に絶大なる力となるであらう。

三　寛仁

帝國海軍の慈父と仰がれた故有栖川宮殿下が、英邁にましましたことは、萬人の等しく知悉する所であるが、その中でも吾人をして感涙に咽ばしめる實話は、殿下が横須賀海兵團長でおはした時代のことである。殿下には日々一二番の新橋發の列車で東京の御本邸から御通勤あらせられた。

或朝雨が降つて居るので、殿下の御附武官を隨へ給ひ、深く幌を卸して腕車に御乘り遊ばされた。高級士官と見て取つた驛の車夫は掛聲勇ましく、雨中を矢の如く海兵團目指して走つた。

恰度その途中に日高といふ木工上等兵曹が、一隊の水兵を引率して海兵團に歸りつゝあつたが、その隊列がバラ〳〵と亂れて、而も其眞中が甚く間隔があつた。車夫は高級士官を乘せたと思つて居るから、此亂れた隊列を將に横斷して、通り脱けようとした一刹那、「莫迦ッ、止れーッ」、と怒れる日高上等兵曹が叫んだ。

ハッと驚いたお附武官牛田少將は「控へろ團長殿下でおはしますぞッ」と叱り飛ばした。素より車上の人が殿下で在らせらるゝとは、些も知らなかつた上等兵曹は「殿下」の一語を聞いて、忽ち棒立ちとなつて顔色は颯と青褪めて了つた。そして水兵と共に直立不動擧手の禮を施した。

殿下は其儘海兵團に成らせられた。それから二三十分間の後には、早くも兵曹の不敬事件が團内の大問題となつて、哀れな兵曹は嚴然たる問罪を受ける爲に、上官の面前に据ゑられた末、遂に一片の斷罪書が、殿下の御机上に傳達された。

曾て一度たりとも盲判を押捺遊ばされなかつた殿下は、此斷罪書を御手にせられると、姑く御覽になつてゐたが、「イヤ是は許して遣はせ！」、と御寛大な御仁慈の御一語をかけさせられ、日高兵曹は不敬の罪を許された。其時日高兵曹の感泣したは無論のこと、殿下の御仁德を傳へ聞いた海軍兵員は、皆感激せぬものはなかつたとのことである。人は誰にしても此寛仁大度の德を缺いては、到底多數と共に事をなすことが出來ない。

四　智勇の人

維新の三傑

智勇兼備の人でなければ、英勇豪傑として世に推稱せられ、後昆に師表と仰がれやう筈がない。殊に一國の大任を双肩に擔ひ、新たに列强環視の間に立ち、積弊その極に達した封建制度を打ち破つて、維新の大經綸を爲し遂げた、所謂我が維新の三傑などがその半世に智勇を奮つて活動した事蹟の目覺しさ！。

三傑とは誰々であらう。曰く大久保利通、甲東と號す。曰く西郷隆盛、南洲と號す。曰く木戸孝允松菊と號す。就中大久保と西郷とは、ともに薩南に生れ、智勇兼備のうちにも、甲東は智に優れ、南洲は勇に勝つて居つた。

勇氣に富んで居た南洲は、征韓論に志を得ないで鄕關に退き、かの十年の役一敗血にまみれて、あはれ城山の露と消えた。そこで人は南洲に同情するもの多く、隨つて南洲の名は甲東よりも聞えて居る。が、南洲の勇も甲東の智によつて重きをなし。兩者相俟つて維新の勳蹟を奏した許りでなく、甲東の智略は遂に南洲の勇を凌いだのである。

切腹の恩命

頃は明治の初め、我が允文允武なる明治天皇の大業を輔けて、討幕の偉功を

奏し、新政の施設を全うしたのは、皆薩長二藩の志士の力に與からぬはないといふので、その勳功に勝ち誇れる二藩の士は、傲然として東都に横行闊歩するやうになつた。そこで以前は勇士として尊敬せられたものも、今は放蕩無賴の遊冶郎と變じ、都人は皆目を側でゝ、その怒りに觸れまいとするありさま、如何にもして此の墮落を矯正せねば、國家の大事はた藩の名譽にかゝはるならんとは、南洲甲東などの常に憂慮して居た所であつた。

彼等は如何なる策で之を救つたであらうか。或時南洲は藩公の命を帶びて東上せる旨を、在朝の藩士に告げた。一同何事ならんと藩邸に集合し、南洲の報告を今や遲しと待つて居ると、南洲は嚴然として、大久保以下、當時顯位高官にある一藩の人々をねめつけていはく、近頃輦轂の風紀紊れ、士氣沮喪したるは、是れ全く廟堂に立つて、人の模範となるべき卿等日常の行爲宜しからざるに由る。こは朝廷に對し奉り、洵に相濟まざる不忠の次第なれば、這度藩公より御咎めあり、一同を斬首にも所すべきなれど、士分たるにより特に一等を減じ、切腹を仰せ付けられたれば、難有く御受申し上げ、各自此場に於て辭表を差出すべしと。さあ此藩公の命に接した一座の面々、一言も發するものなく顔色蒼然たるばかりであつた。

折しも上席せる大久保甲東恭しく進み出で、御受けをしていふには、君公の命一々御尤もと存じたれば、割腹して罪を朝廷に謝せん爲め、こゝに官を辭し、位記を返上する手續に及ばんと。甲東のこの拜命を斷言したのには、一同皆驚かざるを得なかつた。驚いたが致し方がない已むなく一座悉く切腹の恩命を御受けすることゝなつた。

そこで南洲更に容を正し、力ある語でいふには、「卿等一同の心中既に知れたり、今こゝにて切腹せばこれ實に犬死のみ、卿等の爲に惜むべしと思ふ。乃て此度は余身を捧げて君公に謝し、既往の過を許されんことを乞ふべければ、向

後は各自國家の爲め一命をさゝげ、斷じて過ちを再びせざらんことを誓はれよ」と、こゝに一同西郷の友誼に感じ、誓言をなして、辛くも一命を免れたので、その後は上に立つ此等の人々皆謹愼したから、況して下々のものはは、と前日の非行を改めたさうであるが、こは甲東の方寸から出でゝ、藩公に乞ひ南洲と謀つて一狂言をしたので、國家の爲めかゝる智勇の振舞を往々演じたのである。

征韓論

其後二三年たつて、彼の有名な征韓論がもちあがつた。始南洲を動かすに力めたのは板垣退助で、當時財政の局に當た井上馨、大隈重信等と意見が合はぬと見え、彼等の非征韓論に反對し、屢々西郷を訪うて征韓の急務を説いた。けれども南洲は最初容易に耳を傾けなかつたが、板垣の幾度も熱心に説くので、或時南洲のいふには、卿は眞に征韓の利を信ずるか、而して郷は韓一國を對手とするつもりかと。板垣答へて清國容喙すべきも何かあらんと。西郷曰く然らず、清國のみならず、强露もその境を韓國に接するが故に、必ずその後援を彼になすであらう。露國彼れに黨すれば、歐洲も亦之に與すべく、勢ひ日本一國を以て世界を敵とする覺悟がなければならぬと。之を聞いて流石の板垣も聊か驚いたものゝ、遂々征韓論に賛成した。

甲東と南洲

時は方に明治六年のこと、參議陸軍大將たる南洲をはじめ、江藤新平、副島種臣、後藤象次郎、桐野利秋、板垣退助などは、皆この説を主張したので、殆んど朝議が之に傾いて居た。その時丁度右大臣岩倉具視、參議大久保利通、木戸孝允等が歐洲から歸つて來て、此の無謀な朝議を聞いて大に驚き、極力その不可を説いたが南洲等の勇氣勃々として挫けぬ。

そこで結局十月下旬二日に亘りて御前會議を開くことゝなつた。第一日には南洲獨り征韓の已むべからざる理由をのべたので、誰れとて之を反駁を試みるものがない。一人井上馨の反對説を唱ふるばかり、大久保甲東も豫ては非征韓論を主張しながら、此時許りは一言の自説を發しない。仍て人皆甲東と南洲と既に内議ありしならんと思つて居た。會々三條實美公と木戸孝允とは病の爲に出席せず、衆も亦その所決に躊躇したので、翌日を以て再議を凝らすことゝした。

第二日の會議は開かれ、國家の安危は此一決にかゝる秋となつた。簾中には畏くも　明治天皇御若年ながら、輔弼幷に參議等の此の重大事件を議する逐一を聞召さるゝのである。大久保甲東は座を進め、昨の緘默に似ず南洲の所論を一々駁擊し、世界の大勢より今は内政の釐革を先にし、國家の基礎を鞏固ならしむべき時であると論じ、外征の危險を滔々と辯じ立てた。所が之を聞いた他の陣笠連は、なるほど甲東の説は尤もだと、昨日南洲の説に感服したものが今日は甲東の説に傾いたので、兎に角採決を右大臣岩倉具視に促した。

聖　斷

岩倉公曰く此の問題たる實に國家興亡の岐るゝ所なれば、縱令輔弼といへども私に決すべきにあらず、唯　陛下の聖斷を仰ぐの外なしと。そこで征韓論者たる江藤新平は、岩倉公の言を咎めて曰く、　陛下は未だ丁年に達せられず、仍て從來の慣例によると、國家の大事は一に補弼の所決によれり、然るを征韓のことのみ　陛下の御裁斷を請ふはいかにやと。岩倉公之に答へて、これ迄の宣戰講和は内國の事のみなるも、征韓に至つて外國と輸贏を爭ふものであるから、敢て　陛下の裁決を請ふのが至當であるといつた。是に於て　陛下の明裁を奏請したが、果して征韓の不可なる勅諚が下つた。

そこで南洲は責任を重んじて直に勇退したが他の征韓論者には後で副島種臣

などから說諭されて、いや〳〵ながら辭職したものもあつたとの事である。嗚呼當時征韓の議を實行したならば、果たして日本の今日を見るを得たか否かは疑問である。兎に角第一日の御前會議に緘默して居た甲東は、既にその智略を此の間にめぐらし、勇氣にはやらんとする征韓論者を屈するに、理論上の駁擊にとゝめず、その政見を實行する最後の手段として、岩倉公を說くに　陛下の裁斷を仰くべきを以てしたのであらう。

謂ふに我が日本帝國をして數十年ならずして世界の列强と伍する地位に進ましたのは、甲東の智略、南洲の勇氣を見習つた後繼者が、その偉大なる感化を實現し來つた結果ではあるまいか。希くは我等日本國民たるものは此二英雄の人格を以て理想とし、智勇兼備の人となりたいものである。

五　大政治家

少壯時代の伊藤公

公の兩親と生地　不世出の俊傑、曠古の大政治家たる伊藤公の生涯、之を全傳する容易にあらず、こゝに唯公が一生の輪郭を叙して已まんのみ。公は天保十二年九月二日を以て、山口縣熊毛郡束荷村に生る。嚴父は林十藏と稱し、毛利公に仕へし微賤の身なりき。母は琴子と呼び秋山氏の息女、公は晩年の長男として非常に寵愛せられしが、十歲父に伴はれて萩の城下に移り、十藏長門藩の卒族たる伊藤家を嗣ぎしより、公も伊藤氏を冒し久保某の門に學べり。

少年時代の英氣　爾後諸名士を歷訪して、時に鴻儒の玄關番となり、或は食客となりて、閑あれば城內の學問所に通學し、斯くて高杉晉作、野村靖等と刎

頸の交を結ぶに至れり。

公生涯の端緒　年十五既に文武の一般に通じ、精神の強健と事理の明確と、辯舌の流暢とを併せ備へ、藩中優に一頭地を拔けり。公は此時に至る迄利輔と呼びしが、改名して俊助と稱し、始めて公生涯に入り、浦賀預所年番の任に當れり。

憂世の志士と結ぶ　時恰も安政二年、米國軍艦使節の渡來せるあり、尊王愛國の志士四方に蹶起し風雲轉た急なるの秋たり。公年齒僅に十五なりと雖も、經世の英氣勃々、栗原龍造、木戸孝允と交を結び、英式練兵を習ひて大に望みを囑さる。任滿ちて歸るや、吉田松陰の門に遊び、學藝を修むること一年、偶偶栗原龍造の九州に往くに遭ひ、共に陸路馬關に到り、舟に搭して岐陽に遊び、夜半旅館の英人某に就て英學を學べり。

大事經綸の第一着　斯く未だ乳臭兒たるに、夙く既に知己を天下に求め、苦學二年にして木戸孝允の門を叩き、共に東上を約して大經綸の第一着歩を開き、二十一歳にして藩邸に廣長舌を振ひ、偉丈夫の名聲藩中に聞え、山縣狂介、井上聞多、山尾庸三と並に俊傑と稱せらる。

洋行の機運に會す　尋で幾何もなく海外渡行の機運に會し、井上、山尾、及遠藤謹助等と海路萬里、英京倫敦に上陸し、大學に入つて研學の傍ら彼國の形勢を熟察し、文物制度の燦然たる海陸軍備の強烈なるを見、飜つて自國の徒らに攘夷鎖港の陶然たるを想ひ、憂國の至誠止む能はず、遂に同胞を說かんがため歸國の途に就けり。實に元治元年公年二十四の春なり。

維新の鴻業に參す　歸來公は專心攘夷鎖港の非なるを說き、各藩を往來して、薩長同盟、維新鴻業の基礎を作るに至れり。始め公は萩藩内に討幕熱の漲り溢

る丶機運を看取し、高杉、山縣と相連袂して陸に於ける將帥と爲り、薩藩の俊傑西郷吉之介を迎へて薩長同盟の策を講じ、討幕の大議を策せり。當時公は病魔に犯され、發熱苦惱甚だしかりしも、尙櫛風沐雨備さに拮据經營を爲し、幕府は廢亡の機運に向ひ、公が蓋天の活躍は風雲に乘じて馳驅するの概ありき。

一躍顯官に昇る　公の熱誠は遂に幕府瓦解王政維新の大業を形造り、數百年來暗澹として九重を蔽ひたる怪氣は、闊然消散して上下疎通の路開けぬ。卽ち攝政關白の權職廢されて總裁、議定、參與の三職置かれ、一介少壯の伊藤俊助は明治元年一月を以て、召されて朝に入り、名を博文と改めて參與に任ぜらる。門閥尊重の風未だ專らにして、而も微夫此顯官を領し、遂に日本をして今日の文明を見るに至らしめたり。公の如きは夫れ眞に少年立志の好模範なるかな。

明治維新以後の公

公の盡忠的精神　明治維新の宏謨を翼賛し、我が國是を確立して憲政の實を擧げ、上は優渥なる聖慮に報い、下は順良なる民心に和したる、伊藤公の後半生は、屈曲縱橫、千態萬狀なりと雖も、常に一身を盡忠に捧けたるは人口に膾炙せらるゝ、公が壯年の詩に於て之を見る。

豪氣堂々橫二大空一。日東誰使二帝威隆一。高樓傾盡三杯酒。天下英雄在二眼中一。

兵庫縣知事に任ず　明治元年參與に任ぜらるゝや、諸外國との親交を厚うし、外國使臣引見の際に當つては、自ら進んで譯官となり彼我親善の基を鞏固にして、外交的手腕を振つて先輩の威信を深からしめたり。是に於てか外國との關係多き兵庫縣知事に任ぜられ、益々內外人の間に介して斡旋せり。公は傍洋學校の改良發達を企劃し、時の英學者箕作麟祥氏を擧げて敎頭となし、數千の子弟を收容して、英才を養成したるが如き、公が敎育上の功績決して尠少にあらざるなり。

鐵道布設と外債　公は幾何ならずして知事を罷め、會計官判事に任せられ、當時最も困難なりし財務を司り、畫策機宜に適せり。則ち明治二年大藏少輔に榮轉し、從五位に敍せられ、財政の管理を主宰するに至り、外債募集の必要を感じ、之を廷議に附せり。然るに多くは此議に反對せしが、大隈、伊達等の贊成を得て遂に十二月十日、之によつて鐵道布設の大業を可決し、其費用として外債を英國に仰ぐことゝなれり。

歐米に三度來往す　明治三年森有禮に從つて渡米し、歸來四年租稅造幣頭に任ず。尋で同年九月工部大輔に任せられ、幾何もなく、特命全權大使岩倉具視に隨從し、副使として歐米を巡察し、四年十一月十日より六年九月十三日に至る恰も一年九個月餘の視察を經て歸朝せり。公時に年三十一歲。歸來參議兼工部卿に任じ、當代隨一の外國通なりしかば、紀行見聞錄を捧呈して、國政一新の急務を論じ、條約改正京阪鐵道の布設、郵便電信の創設等何れも皆公の熱誠によつて成らざるはなし。

急速なる公の榮進　其後四度目の渡米を寺島外務大輔と共にし、專ら實業を視察し、次で英國に赴き諸制度を見、佛京巴里に赴きて文華の燦然たるを觀取し、月餘にして白耳義國に農業牧畜の實況を視察し、佛國を經て獨逸伯林に入り、學術技藝の新知見を得、一蹴露都に着して他日の經綸を收め、轉じて北日耳曼の境域を過ぎて瑞典に出て、更に伊太利の羅馬に赴き、蘇士運河を渡りて阿弗利加内地の古蹟を探見し、埃及、亞剌比亞、印度に航し、支那内地を經て歸朝せり。かくて明治七年地方官會議長となり、八年法制局長官を兼ね、十年勳一等旭日大綬章に敍せられ、十一年内務卿を兼ぬ。次で十三年參事院議長を兼ね、急速の榮進をなせり。

憲法制定の調査　公の内外に於ける聲望隆々として昇天の勢なりしが、立憲確立の大義を建白するに至つて、遂に勅命を奉じ憲法制定の任に當れり。是

に於て公十五年更に歐洲に赴き、各國の立憲政體を調査せり。當時は既に維新の首腦たりし大久保、岩倉の兩公逝き、大隈、黑田其他二三の人士國政の主動者たりしが、公も亦其一人として群臣に傑出し樞機に當れり。

位人臣を極む　明治十七年宮內卿に任じ華族制の發布あるに至つて、特旨を以て伯爵を賜はり、正四位勳一等に敍せらる。蓋し公が內國の故典憲章に通曉し、且つ海外の制度文物に精達せる外、內に在つては屬僚の統御に長じ、外に對しては民衆統治の術を得たるを以て、明治天皇の親任厚く、權勢の熾盛なる、實に驚くべきものありしなり。是を以て十八年特派全權大使として淸國に赴き、李鴻章と會見して所謂天津條約を締結し、其年十一月始めて內閣總理大臣、兼宮內大臣に任じ、從二位に累進す斯の如く公が人臣の極位極官に達したるは、四十四歲の元氣旺盛、才力縱橫の時なりとす。

憲法制定の大任　公の首相たるや五條の綱領を制定し、以て後の官制改革の要目を形造り、統緖日に張り、前途有望なる形勢の時に、俄然條約改正論は內閣の大動搖を來し、二十年には一時外務大臣をも兼攝せしが、二年有半にして瓦解の運命に至れり。公は二十一年樞密院議長に任じ、憲法起草に從事して翌二十二年完成し、その年二月十一日を以て、此の大憲章は發布せられたり。是に於て上下一致滿腔の感喜を以て、此大憲の制定を祝し、新日本の國是は公の力に依つて作成せられ、公はその功により旭日桐花大綬章を賜はる。

議會開設後の公爵　二十三年國會開設せらるゝや、公は貴族院議長として得意の議事整理を爲しゝが、翌二十四年松方內閣の成立と共に再び樞府に入り、二十五年大命を拜して再び首相となり、議會と大衝突を起し、停會に次ぐに停會を以てし、遂に散會を斷行して非難褒貶の間に嚴然として活躍し、二十六年には法典調査會總裁と爲りて、法典の改善に盡力し、二十七八年日淸戰役に際しては、伊藤內閣の聲譽海の內外に轟き公の名譽權勢絕頂に達せり。二十八年

清國講和大使李鴻章の來るや、公は全權辨理大臣として樽俎折衝、偶々一凶漢小山六之助の李鴻章を狙擊せしにより、三國の干涉する所となり、遼東還附の外交的一失敗あらしめたるにせよ、所謂馬關條約を締結して、公は侯爵に陞授せられ、大勳位に敍せられ菊花大綬章を賜はり且つ金十萬圓を授與せらる。尋で正二位に敍せられしが、戰後に於ける公の經營は盤根錯節を極め、二十九年遂に骸骨を乞ふの止むなきに至れり。

大政黨を組織す　是に於て公は大臣の禮遇を受け、風流に意を寄せしが、三十年には威仁親王に隨つて英國に赴き、三十一年には亦入つて第三次の內閣を組織せしが、事志と違ひ半年ならずして再び總辭職をなし、三十二年帝室制度調査局總裁となる。三十三年八月二十五日野にあつて立憲政友會を組織し、尋で此政黨を率ゐて政黨內閣を組織せしか、圖らずも渡邊大藏大臣と意見の衝突を來し、閣僚間の一致を缺きしかば、貴族院との衝突を招致し、其結果亦も職を罷めて飄然歐米漫遊の途に上れり。

日露戰役前後の公　歸朝後久しく政友會總裁として、憲政有終の美を濟さんと努めしが、時局は長く公をして野に在らしめず。三十六年公は再び樞密院議長に任じ、帝室制度調査局總裁となる。同時に西園寺公望侯を政友會新總裁に推擧し、公は樞府に在りて、山縣公、井上侯等と共に桂內閣を助け、三十七八年の日露戰爭をして空前の大捷を得しめたり。

統監としての任　日露戰役終りを告げ日韓協約の京城に締結せられしより、公は韓國の獨立を擁護せんが爲め、特派大使として韓國を慰問し、四十一年復び韓國に赴き、尋で韓國統監に任じ、京城に駐在して萬難を排して對韓政策を斷行し、驚くべき偉績を擧げたり。三十九年菊花章頸飾を授けられ、尋で公爵に陞敍せらる。四十年には優渥なる勅語を賜はり、尋で韓國太子の太師を託せられ、公の聲望絕頂に達せり。四十一年大森の恩賜館憲政殿に六十八回の誕

辰、夫人還暦の盛大なる壽筵を開きしが、その時一詩を賦して曰く、

四顧悠々歳月流。已過六十七春秋。殘年衰朽成〻何事〻。欲〻報〻君恩〻志未〻休。

と實に公の一身を誠忠に捧げたる感歎に餘りあらん。

一朝奇禍に殪る　公は韓國皇太子の太師として、泰山の重任を双肩に擔ひ、且つ統監として韓帝の巡幸に隨從し、韓國統治の上に多大の效果を收め、功成り名遂げて四十二年允許を得て統監の重任を解き、樞密院議長に任じ、專ら韓國太子の輔育に意を注がれたり。嗚呼公は老後を以て猶ほ且つ公に報ずる拳々、我が國史上未曾有の勳績を垂れたるものといふべし。而も大事測り難し、烈夏爍金の際公は太子を擁して、東北見學の途に上り、歸來十月再び重大なる使命を帶びて滿洲を視察し、二十六日哈爾賓に至りて、圖らざりき韓國兇徒の爲めに狙擊せられ、英魂長へに去つてまた歸らずなりぬ。公時に年六十九。是日特に從一位に敍せられ、内外哀悼、勅して國葬を行ひ十一月四日武藏國荏原郡大井町に葬る。謂ふに公は我が日本帝國の元勳たるのみならず、東洋をして文明に誘致したる偉功は、今後永く竹帛に燦然たらん。

六　至誠の人

乃木大將

夫妻　秋風一過梧葉の凋落すら身に染みて、我等日本國民の哀愁いとゞ堪へ難き大正元年九月十三日、明治天皇の靈柩を乘せ奉れる轜車、肅々として當に殯宮を出づる午後正八時といふに、嗚呼我が日本武士の典型乃木大將は、御發引の號砲を合圖に、赤坂新坂町の自邸奥座敷に閉ぢ籠り、幾多の遺言狀を殘して、慘烈悲愴の自刄を遂げられ、次で夫人も亦自裁その跡を追ひ、共に先帝陛下に殉せられたり。此悼ましき葬儀は十八日午後三時出棺、十餘萬の官民に

送られ、青山齋場に於て莊嚴に行はれ、新らしき一對の墓標は青山墓地に建てられたり。それより日々の參拜者は群をなし、香花四圍に堆積せり。余も同月二十日一家を伴ひて墓前に禮拜す。無量の感慨に低徊する數時歸路に就くころは、夕の月高く冴亘りて墓畔の蟲の唧々たる聲も、大將一家の殉忠を悲むかと聞え、哀さはいやが上に限りなかりき。

今猶は疑問に屬す　乃木大將の自刄せられたる動機は、今猶疑問に屬すれども、遺言狀の表面は明治十年役に、軍旗を失ひたるの後死處を得ずと云ふにあれど、別に日露戰役に夥多の將校士卒を失ひたるにより、當時割腹して罪を明治天皇に謝し奉らんとしたるが、天皇には御氣色を改めさせられ、將軍に對し、卿の衷情は朕能く之を知る。然れど今は卿の死すべき秋に非ず、卿若し强ひて死せんとならば、宜しく朕が世を去りたる後に於てせよ。との意味の御沙汰あらせられたれば、將軍は感泣しつゝ御前を拜辭したることもありしとのことなれば、至誠至忠なる大將は先帝の崩御に遭ひ、前に自ら期したる最期を決行するは今なりと信じ、絶大の敎訓を我等國民に遺して、從容として殉死を敢行せられたるものならん。

大隈伯爵の哀惜　大隈伯も乃木大將の死を哀惜し、純潔淸廉當代に於ける古武士の代表者ともいふべき將軍が何故に自裁せられたるか、十四日の夜もすがらその原因につき考へられたりと。而してその原因とは次の三に歸すべしと物語らる。

一は日露戰役にその配下より空前の死傷者を出したるに對し內心の苦痛なり。

二は世態の現狀非なるに對し、事々不滿を感じ來りたる結果なり。

三には先帝陛下の遽然たる崩御に遭ひ、黃泉の御旅の御守りたらんとの心切

なりし結果。

將軍の義烈武勇　將軍は正義廉潔の點に於て嘗て一點の非難を受けしことなく、一度戰陣に臨めば鬼神も屈伏するの勇あり。されば日露戰爭には、難攻不落の天險を以て世界列强より目されたる旅順攻圍の大任を拜命し、バルチック艦隊の回航や、奉天の大會戰に急がせられて、遮二無二の無理攻を敢てし、遂には肉彈飛ぶ前古未曾有の慘戰となり、味方の死傷も從つて多く、將軍自身にとりても十日の間に愛子二人を喪ひ將軍の繼嗣こゝに絶えたり。尋常人なりせば此時當に落膽失神世を果敢なむべかりしを、將軍の資性義を重んずる、唯陛下幾千の赤子を犧牲に供したるを悲しみ、爾來時ある毎に自ら彈丸雨飛の矢面に進み、人の制止することをも聽かれざりしと。

大將の嚴正廉潔　大將は嚴毅方正にして力行倦むことなく、儉素自ら持し眼中公あつて私なし。將軍の戰場に於ける行動は、敵國の人も尙賞讃措かず、大將の旅順を陷落したる後、敵將ステッセルと對面の狀を敍したる露國クプチンスキイ氏著『所謂旅順の曉將』と題せる書には次の如く記せるにても其一斑を知らん。

『ステッセルは自己の身邊の安全なるを知り、乃木を訪問せり。彼れは旅順に於て馬匹中、稀に見る所の肥大なる蘆毛の名馬に跨り、自國人より危害を受けんことを懼れ、日本警官に護衛せられ、陷落せる族順の市街を疾驅したり。乃木は彼の爲めに晝餐を設け、三鞭酒を酌み共に撮影し、席上種々の談話ありたるが、其中には今にして思へば滑稽なるも、當時は汗顏に堪へざるものありき。ステッセルは乃木に向ひ「閣下の令息は、二人とも旅順に於て戰死せられたりと、誠に哀悼の至りに堪へず」と言ふや、乃木は起立し凜然として答ふらく、「余は子供等の爲に是れ以上の名譽を望むを得ず、彼等の死は余の以て誇りとする所なり。而して閣下には令息あらせらるゝや」と反問せり。「然り余にも亦

子供あり」乃木は「定めし閣下と共に當旅順に在らせらるゝならむ、令息等幸に健在なりや」。「否、彼等は此處に在らず、目下彼得堡に在り」。斯くて三鞭酒を乾盃したる後、ステッセルはひらりと其愛馬に跨り、日本人の目前に於て之を乘り廻はし、其性質を說明しつゝ之を乃木と其幕僚とに示せり。日本人は皆微笑しつゝ、見事なる駿馬よと賞讃せり。是に於てステッセルは乃木に向ひ、「余は此馬を閣下に贈呈せんとす、小官ステッセルの記念とし閣下之を受納し給はずや」と云へば、乃木は莊重なる語調を以て之を辭せり。曰く「余は遺憾ながら受くるを得ず、此馬は日本政府に屬し、吾人は之を勝手にする能はず、日本將校は官物を濫用し、又は着服せず』と。將軍の行動は萬事斯の如くなりき。

乃木家と將軍の略歷　乃木家はその先近江源氏佐佐木氏より出で、其の後裔に乃木十郎希次といふものあり。長州長府藩士にして兵學及び武家故實に通曉す。身を持すること勤直に子を敎ふること嚴格なり。特に拔擢を被り藩主の世子宗五郎(元敏)二子平六郎(後德山藩主)に傅となり、敎養其の宜しきを得たり、大將は實に其の第三子なり。又夫人は鹿兒島藩士湯地定之氏の四女にして、天性溫順貞淑なりしと。薨去前學習院長にして軍事參議官從二位勳一等功一級伯爵たりし陸軍大將乃木希典氏は、嘉永二年十一月十一日武藏江戸に生る。維新の際國事に盡す所あり。明治四年十一月少佐、同十年四月中佐に進み西南の役に功あり。十三年大佐、十六年少將に昇進したるも、一時不遇の境に沈淪し少將たること十一年間、明治二十五年には桂公の第三師團長時代に其下に旅團長たりき。二十七年日淸戰役に混成旅團長として出征し、二十八年功を以て中將男爵となる。夫より第二師團長臺灣總督第十一師團長に補せられ、三十七年日露戰役に第三軍司令官として出征し、陣中にて大將に進み、旅順攻擊に英名を轟かし、露のステッセル將軍をして遂に降らしめ、三十九年軍事參議官に補し、四月功一級金鵄勳章を賜り、同四十年學習院長を兼任し、從二位に敍

し伯爵を授けらる。四十四年依仁親王に隨ひ英國皇帝戴冠式に參列し、大正元年九月英國親王來朝御大葬に列せらるゝに付きその接伴員となりしが、此月十三日薨ず。享年六十四歳。赤坂新坂町の邸には家族として夫人靜子ありしのみなりしが、夫人も亦その日逝きぬ。而して夫人は年五十六歳なりき。噫。

七　首相大隈伯と其精力

大隈伯の輿望

大隈伯首相新任　大正三年四月十六日大隈伯が首相兼内相に新任せられたので、國民は皆蘇生の思ひをなし、内外の輿望は伯の一身に集まつた。日々伯爵邸には貴顯よりの祝意を表し來るもの引きもきらず。余も同月十八日の午後その邸に出頭し、祝辭を伯爵に呈した。

政治思想涵養　曾て日比谷に國民大會の眞最中余は伯爵を訪問して、余の早稲田大學に於ける校外生教育の爲に、屢々青年訓話を請ひたしといつた。すると伯は「毎回でも話をしてやらう、何でもこれからの青年は、學問をして立憲思想を涵養し、健全な國民とならなければならぬ」といはれた。

眼中唯一國家　伯が一度口を開けば乃ち國家の爲め、忠君愛國の念を青年に吹込む。而して青年を愛するの情は、一度伯に接すると、眞の祖父さんにでも遭つた樣な心持になつて、欽慕せずには居られない氣になる。伯の新聞記者に接するにも、官省の給仕に至る迄も威嚴ある間に如何にも懷かしい、情の籠つて居る感に打たれる。

氣持の好い大臣　四月十七日内務大臣として伯は省員一同に、四十分間の名

演說を試みられた。大小の官吏は恍惚として各自の職責の重大なることを自覺し、今迄の氣分はこゝろと變つた相である。後で某官吏が人に語て曰く、「我々長く勤務してゐるが、這麼氣持の宜い大臣に遇つた事は始めてである」と、伯は實に世界の名宰相たるべしと吾人は信ずる。

新聞記者の人氣　伯は內務省から退出の途すがら、新聞記者室の前へ來て、記者連の姿を見ると、忽ち礑と歩を止めて、記者諸君に向つて挨拶するとばかり、滔々として內務省に未だ曾つて見たことのない、大臣の廊下演說があつた。「我輩は老人である。併し經驗あり學識ある數多の省員諸氏の言を大に聞いて、我有する理想をも實行する。孰れその中緩々諸君に會して、材料も大に供給すべし」と、どこ迄も公明正大主義、開放主義である。

樂天的老船長　伯は此前十五日新內閣組織の大命を拜受し、參內を終つて歸邸せられると、待合せた都下各新聞通信記者三十餘名を應接室に引見し、滔々數千言の意見を發表せられたが、自ら樂天的老船長を以て任じ、七十七歳といふ高齡に達せられても、我が光輝ある日本帝國の國威を益々振張せんが爲に、青年と共に一致協力して努力しようと聲言せられた。

內閣一部改造　大正四年七月三十日に至り、大浦內相の瀆職事件なるもの起り、爲に首相はその董督不行屆の理由を以て、內閣總辭表を捧呈するの已むを得ないことゝなつた。聖上陛下には畏くも夫れには及ばざるにあらずやとの難有き御諚を賜り、深く御軫念あらせられた。それから山縣、大山兩公、松方侯等を御召しになり、元老會議を開かしめられたが、結局元老は極力留任に斡旋せられたので、伯は遂に成敗利鈍を度外に附し、內閣の一部を改造し伯自ら外相を兼ねて留任せられることゝなつた。伯は　聖上陛下の御親任に對し、恐懼感激措く能はず、八月九日參內したるに、御座所に於て拜謁の上、優渥なる聖旨を賜はつたことを謝し奉り、留任の上は一層國事に精勵して、君恩の萬

分一に報い奉るべきを言上し、叡慮を安んじ奉つることゝなつた。

青年は奮起せよ　將來の青年は老伯の言行を寤寐にも忘るゝことなく、學業に奮勵努力して何時かは國家の爲に老伯の志望精神を紹ぎ、世界の文明的競爭を制し、益ゝ日本帝國の國威を輝かす覺悟で奮起すべきことを望むのである。吾等は大隈伯が、畏くも　今上天皇陛下の御親任を忝うした喜びを唯口で陳べた許りでは詮のないことである。赤誠が青年の言行に自ら溢れ、老船長の訓言を不斷に實行し、恰も船員が各その職務を盡すの心で、各自にその本分を守り、國家社會に能ふ限り貢獻することを肝要とする。

偉大なる伯の精力

內閣總理大臣早稻田大學總長大隈伯爵は、大正四年數へ年七十八歳の高齡を算せられるのであるが、確かに百二十五歳の長壽を保たうといはるゝ程の元氣を有つて居られる精力に、我等は非常なる敬意の念を起さゞるを得ない。

大抵の老人は七十にもなると冬季は炬燵でも擁き、夏期は避暑てもして、樂隱居をするといふのが當然の樣に思つて居るが、伯は矍鑠として壯者を凌ぐ勇氣と體力がある。で、國家多事の際內外の施政を料理せらるゝのみならず、私人としても又常に幾多の名譽職を引受けて、能ふ限りの斡旋をなし、毫も煩勞を覺えられる風がない。

伯の如き偉大にして健全なる精神は、又その精神を宿れる身體が、偉大にして健全であらねばならぬが、どうして斯の如き身體の修養が出來たのであらうか、殆ど不思議な感じがする。で、その今日に至れる長壽健康の徑路は、强ち常人と異つて居られるといふのでもない。

伯は天保九年二月十六日佐賀の生れで、大正四年十月は七十七年八ヶ月であるが、五十歳と今日と比較して味覺は差したる變化なく、酒は中年までは盛ん

に用ひられたが、遭難後は殆ど用ひず、茶は煎茶を好み、次に番茶を用ゐられてゐる。別に嫌忌する食物は無きも、最も嗜好せられる食物は野菜類で、夏期には氷をも用ひ、脂肪類は餘り多く取られぬ相である。

調理は鹽の辛きを好まれ、毎日の食事は主として日本食にて朝食は汁、鷄卵又は魚、野菜等にて大根おろしは毎日用ひ米飯二椀牛乳二合を定量として居られる。晝食は米飯二椀に副食物三品又は四品、夕食は晝食同樣で晝夕とも、食後には必ず果物を用ひ、間食には菓子を少量とられる。中年時代の朝起及び夜中就褥時は不定にて夜は十二時過ぎに及べるも、目下は夏冬の差はあるが凡そ午前五時より六時迄の間に起床、午後九時半より十時頃までに熟眠せられる。

冷水浴も冷水摩擦もせられないので、感冒には罹り易い方、大病といふ程のものは六十五歳の時、膽石病に罹られた位のものだ相であるが、胃病には度々罹られた。入浴は毎日一回、室内娯樂より郊外遊覽を好まれ、餘閑には讀書もすれば雜談は最も好まれ、第一の趣味は無論政治であるが、園藝の趣味は三十歳前後より有つて居られる。それから娯樂といつて何もなく、只圍碁は四五席位續げられる。齒は主に義齒で、殘存してあるのは上下僅かに數本に過ぎない。大體齒は中年から良くないとのこと。又耳は遭難の時に害はれた。頭髮は禿げた方が早く、それから後に白くなられた。視力は餘程宜い樣であるが、今では老眼鏡を用ひられてゐる。兎に角大隈伯の如きは、日本人の最上理想とすべき精神と體力とを有せらるゝ精力絶倫の人といはねばならぬ。

八　天成の司令官

東郷大將

日本海大海戰　回顧すれば十餘年前のことである。大日本帝國の運命を決す

べき日本海大海戰は、明治三十八年五月二十七日を於て演ぜられた。旗艦三笠を先登とし、敷島、富士、朝日、春日、日進の順序を以て、早天對馬海峽に敵の波羅的艦隊を邀へたのである。此時一擧にして敵艦を悉く粉碎したる聯合艦隊司令長官は、誰あらう元帥海軍大將伯爵東郷平八郎その人である。

偉人の初陣　大將が海國男子として初陣に參加されたのは、まだ僅に十七歲の少年で、文久年間のことである。で、初陣の海戰といふのは英國艦隊が鹿兒島を砲擊した時で、故伊東、井上の兩元帥、大迫現學習院長などと參與せられたのである。此時には大迫大將と共に島津公の旗下にあつて活動し、次で函館戰爭には春日艦に在つて、拔群の勳功を建てられたのである。

帆船世界一週　元帥の閱歷と人格とに關しては、海軍大佐小笠原長生子の談によると、大將は明治四年英國に留學し、四年の後同八年に英國の帆船ハンプシャといふ千三百噸ばかりの小船で、世界を一周された。これは當時として大事業であつたに相違なく、又我が海軍のために有益な經驗であつた。扶桑艦建造の監督を了り、もとの比叡艦で歸航されたのは同十一年である。

揚子江の遡江　同十五年には、天城艦で朝鮮の亂に赴かれ、十七年清佛戰爭の際には、天城艦長として上海に到り、揚子江を遡つた最初の人かと思ふ。その時臺灣の基隆で、クールベーと會談し、占領地自由巡察の許可を得られた。

英斷の一事例　二十六年には、布哇居留民の保護に赴き、又日清戰役には浪華艦長として、高陞號擊沈の記錄を殘された。これは當時非常にやかましい問題となつた事件で、大將の決斷力を想望すべき一史料であらう。三十三年の北清事件には司令官となり、次で三十七八年日露戰役には三笠艦長として偉勳を樹てられたこと、及

び其後のことについては、今更茲に贅する迄もない。惟ふに大將の傳記を詳しく讀むと、そこに我が海軍發展史の一面を見ることできるのである。

春風滿座の感　大將の沈默は有名なものであるが、而も大將の在る處春風座に滿つるの感がある。大將の家庭に入ると、事々物々悉く教訓ならざるなしで、その質素なこと、邊幅を飾られないこと、來客に對して召使に對してなど、一々に就て語る迄もない。又細事に注意されること、記憶力の强いことは、實に驚くべきものである。大將の如きは、實に天成の司令官と謂ふべきであらう。

九　重大なる責任

文相高田博士

大正四年は早稻田學園にとつて、記念し慶賀すべき一新記錄が報ぜられた。

それは外でない、學長高田博士は五月十九日を以て勅選議員に任ぜられ、次いで八月十日に於ける大隈伯の內閣改造に當り、文相に親任せらたことである。吾等は之を以て母校の光榮として衷心の欣悅に堪へない。且つ同年五月二十八日學長の勅選、並に校友諸氏三十餘名の衆議院議員當選祝賀校友會が、京橋區築地精養軒に催ほされた際、博士が來會三百の校友に對してせられた挨拶は、一層此感を强からしめた。

博士はいはれた。「今回早稻田大學學長たる自分が勅選議員の恩命に接したのは、私立大學が其教育上の價値を認められた一の證券で、自分一個人としての光榮は勿論、早稻田大學の爲め、はた私立大學全體の榮譽であると信ずる。自分は早稻田大學學長なるが故に、大學を代表して勅選せられたものと思ひ、此の重大なる責任を全

うせねばならぬことを深く感ずる」と。曩には明治天皇の恩賜を辱うし、次で今上天皇陛下の皇太子時代に於ける行啓があり。今又此優渥なる學長の勅選に次いで文相に親任せられたことを思ふと、早稲田學園に學んだものも學ぶものも、益〻奮勵以て皇恩に報じ、國家に盡す重任を自覺せざるを得ない。

文部大臣にして貴族院議員なる高田博士は、萬延元年三月江戸深川に生れた。嚴父の名を貫平といひ、博士はその第三男であるが、家督を相續せられたのである。明治九年大學豫備門に入學し、同十一年東京大學文學部に入りて文學及政治經濟學を學び、同十五年卒業後は專ら政治學及英國憲法を研鑽せられた。同年偶々大隈伯野に下り東京專門學校設立の議があつた。博士は畏友故小野梓先生の薦により、入りて教鞭を執り、同二十三年國會開設の際、埼玉縣第二區（川越町附近）から推されて衆議院議員となり、又その傍ら讀賣新聞主筆となつてゐたので數年間に亘り、同三十年松隈内閣が成つた時に外務省通商局長に任ぜられ、隈板内閣の時には文部省參與官となり、高等學務局長を兼ねられた。後大隈伯と共に官を辭し、早稲田大學學監として大學建設の事に當り、同三十四年法學博士の學位を授與せられた。斯くて同四十年以來早稲田大學學長として其經營の衝に當り、這次文部大臣に親任せらるゝに至つたのである。此の他高田博士の我が國教育界に貢獻したる功績は頗る大なるものがある。

十　恩師の半面

我が邦精神界に多大の貢獻あつた故島地默雷氏は余の恩人で、余が學生時代に父を亡ふや、爾來殆ど親の如く師に敬事し、社會に出でゝ後明治三十二年の如き、毎週土曜日には、必ず麹町にありし師の寓白蓮社に遊び、藹々たる師の溫容に接し、教を受くるを樂としした。

師は天保九年山口縣和田村の眞宗本願寺派尊照寺に生れた。初め佛儒二學を

修め、維新以來百度革新の時機に當り、自ら率先して佛敎徒の覺醒に盡瘁し、熱烈なる筆舌の力によつて人心の開導に努め、師の將に入寂せられんとするに當り、「萬有は不生不滅なり」との信仰告白を名殘りに、七十四歲の長壽を全うし、明治四十四年二月三日午後一時十分をもつて圓寂せられた。

師は學識德望に於て非凡なりしのみならず又頗る頓智に長けてゐた。嘗て非上侯の瘍を煩はれた時、その見舞に贈られた狂歌などはその一斑を窺ひ得る。

常々に御用の多い方なれば瘍の出來るも御尤もなり。
同師が演說に氣乘りして來ると、聽衆の倦怠を覺ゆるなどは、一向御構なしなので、演說が濟んでから侍者が師に注意をすると、「私の演說などは長いことがあるかい、まだ〳〵長いものがある」と、侍者それは何んなものですとの問ひに答へて、

牛の尾に鰻くひつき蛇ぬるりそれで足らずば鱧もくひつけ。

師が禁煙のしはじめに卷煙草入に名刺を入れて會に臨むを常として居た。或時某所の會合はてゝ座を立つに際し、傍にあつた卷煙草入を袂に入れて歸宅し、例の煙草入を取り出して見ると、自分の煙草入の外に、それとよく似た別の煙草入を持つて來た。はて合點いかずと中を檢めると九條家の家令伊藤可宗といふ名刺が入つて居たので、全く自分の思ひ違ひて持ち歸つたことが判然した。師は早速使に謝罪狀を持たせて件の品を返却するに當り、手紙の末に次の如く筆を走らせた。

かそう(可宗)ともしまじ(島地)借るともことわらで默つて袖にのむ煙草入。

十一　母校の中心人物

母校早稻田大學總長大隈伯はいはずもがな、名譽學長高田博士、學長天野博士、名譽敎授坪內博士を始め、市島名譽理事等が過去に於ける我が母校の中心

人物で、皆創立以來三十餘年間一日の如く、共同一致して盡力せられた結果、遂に今日の盛大を致したのである。

世界的偉人と推稱せらるゝ大隈伯が、我が早稻田大學に對せらるゝ理想は、學問の獨立を以て國家的大事業とし、こゝに幾多の人材を養成せらるゝに至つたのである。

高田博士は憲法學者として、天野博士は經濟學者として、坪内博士は文學者として、明治大正の歷史に特筆大書せらるべき人物であるが、此三博士が早稻田大學の經營に盡されたことは、殆ど想像も及ばないのである。

創立當時の談を聞くと第一回の入學者は僅に三四十人で、最初の經費は大隈伯爵家から補給して貰ひ、講師の多くは好意的に敎鞭を執つた相であるが、高田博士の如き僅に三十圓の俸給で、一週五十時間も擔任せられたこともあつたといふが、三十圓は當時最高の給料であつたとのことである。

今日では文學專門の坪内博士も、當時は歷史とか憲法等迄も擔任せられ、敎師は皆力限り根限り、自分の專門に非ざるもの迄も引受けて敎授せられた。廿五年祝典の時に故田原高等豫科長が、創立當時を物語つて、暗涙に咽ばれたといふが、經營の苦辛慘澹を思へば、さもあるべきことで、政治上の壓迫、財政上の窮迫、學問上の競爭、實に我々後輩に對する生きた敎訓を、親しく嘗め盡されたのである。

大學創立以來奮鬪し來つた中にも、高田博士の識見、施設の伎倆に至つては、中心人物同人間の皆推重する所で、大學經營の爲めに政界をも去り、人爵をも顧みなかつた。大學の爲めに出版部をも設け、日清生命保險會社も、日清印刷會社も創業するに至つた。此等は悉く高田博士が帷幄にあるので發達し來つたものといはねばならぬ。天野博士は實業學校を學園に創め、坪内博士は文學科出身者を指導する爲に、早稻田文學を刊行せられ、文藝協會には少なからざる

私產を投じて組織せられたこともあつた。母校の隆盛は三博士の外に、市島名譽理事の對外的手腕が、與つて力あつたことも、見遁がすことが出來ない。此外今回新たに理事となつた鹽澤昌貞、田中穗積の兩博士及び久しく幹事の任に當られ、同じく理事に擧げられた田中唯一郎氏をはじめ、その他各科長教職員は常に一致協力城西早稻田の名を世界的大學園の所在地たらしめた。

十二　三寸の舌頭

男子たるものは三寸の舌頭で、鬼神を動かす底の辯舌がありたいものだ。今から二十餘年前政談演說の盛であつた頃には、高田博士や、大隈伯後援會々長市島謙吉氏等は、改進黨の急先鋒として各地に出演し、或時は侃々諤々、或時は滔々懸河の辯を振はれたものだ。であるから今日でも演壇に立れると、機に臨み變に應じ、圓轉滑脫、流石に當年政敵の妨害を物ともせず危險を侵して鍊へ上げられた爽さは、中々尋常人の及びもつかぬ所である。

その頃市島謙吉氏は、上遠野富之助氏外一二政友と共に、富山の政談大演說會に乘込んだ。政敵の壯士連は手ぐすねひいて、妨害を試みようと待ち構へてゐる。元來此地方では壯士等が辯士に石を投げつけ、それで辯士を困らせる惡い習慣があつた。此日も各自に小石を袂に蓄へて、いざといへば雨霰の如く速射しようといふ劍幕であつた。

これしきの示威にビクともせぬ市島辯士、心中既に成算があつたので、他の同人が各先を爭ふのを强ひて第一に登壇した。拍手は急霰の如く未だ一言を發せざるに、はや罵聲をあびせかける者もある。けれども辯士の自信は悠揚敢て迫らず、滿場の氣を呑んで了つた。

「滿場の諸君！　諸君は日本第一の天嶮親不知子不知を知らずや」

「日本第一の天嶮親不知子不知」の一語は北越人の耳には雷の如く響いたのであ

らう、騷然たりし聽衆は水を打ちたる樣に鎭まりかへつた。

辯士はこゝぞと疊みかけて、「其前日此天嶮の上を人車で通行した時、直ぐ眼下に見ゆる水際に石を投じ、果して之に達すべきや否やを試みた。而して一行中投石家を以て名を得た上遠野氏すら、容易に彼の點迄達し得なかつた。由來富山人には投石を以て任ずるの士頗る多いと聞くが、若し伎倆を同氏と闘はさんとなれば、これから此壇上に現はれるから、須らく雌雄を決せられよ」と。此の奇想天外より落つる的の演說は、初め場内に滿ちてゐた、殺氣の氣ぶりは消散して、滿場笑聲に化して了つた。市島辯士は此機をすかさず、自己の主義政見を、諄々と說き去り、辯じ盡して壇を降つた。

樂屋に引込むと、皆出かした〳〵と稱讃する中に、獨り上遠野氏のみは聊か不滿の體で「怎も市島君は酷いことを言ふぢやないか、僕を石投げの名人にして了つて、僕は一向そんなことを知りやしないのに」と小言たら〳〵であつたが、結局此の石投名人といふ頓智のきゝ目で、一同飛礫の御見舞を免れ、無事に閉會を告ることが出來た。

十三　實業界の重鎭

澁澤榮一男爵は實業界の重鎭として、現代の理想的銀行家である。男は敎育に熱心し、高等商業學校や早稻田大學や、その他公私の學校に關係が少くない。啻に敎育に留意せるのみならず、慈善事業に對しても斡旋の勞をとられてゐる。實業家は動もすると品性の下劣なものとして、社會から指彈せられる。所謂成金黨なるものが投機的事業をなし、偶然一攫千金の奇利を博すると、直に大厦高樓に驕奢を極め、その反動到ると惡行を働き、遂には元の默阿彌となるものが多い。男の投機を戒めらるゝ亦宜なるかな。

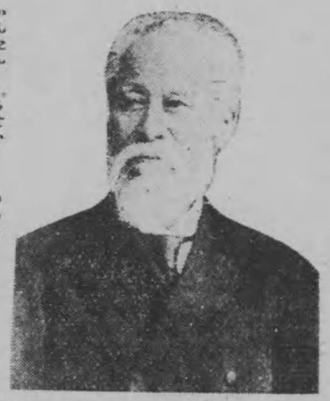
男は第一銀行の頭取で、その他幾多の大會社重役を兼ね、帝國の實業及實業

教育上、男の力に待たざるもの殆どない。男は天保十一年を以て武藏國八基村に生れ、埼玉縣平民市郎左衞門の長男である。壯にして江戸に出で、漢籍及劍道を學び、それから京都に赴いて一橋家に仕へ、慶應三年に歐洲巡遊の途に上り、翌年歸朝して大藏省に入り仕官したが、後出で、第一銀行を創立した。卽ち是れが我國銀行の嚆矢である。

男は又東京高等商業學校の前身である商業講習所を設立し、故伊藤公、大隈伯等と共に、東京商業會議所を組織し、永くその會頭となつて商業の振興に努められた。それから先年訪米實業團々長として歐米を巡遊し、大正三年夏には支那各地を視察し、老いて益々我實業界及社會事業に盡力せられ、實に我が實業界になくてはならぬ理想的人物である。

十四　奮鬪的商人

模範的實業家森村翁



世には一代にしてよく巨萬の富を成し、之を國家社會の爲に善用することなく、動もすれば小心翼々として、爪に火を燃す底の吝嗇を極むる守錢奴あり、或は富を惡用して非行を敢てし酒池肉林の榮華に耽り、殆ど飽くことを知らざるものあり。然れども此等の儕輩は、一片至誠の念に缺くるが故に、その富は却つて國家社會のあらゆる階級を腐敗せしめ、その身も軈て甘鄲の蘆生の夢寤めて、後悔の念に心を惱ますに至らん。而して我が邦現代の

實業家を通觀するに、滔々として此種の墮落せる、所謂成金黨跋扈せるが故に、維新以來駸々として發達し來れる、我が實業界の前途も、頗る寒心に堪へざらんとす。

獨り此時に當りて森村翁の如き、至誠にして元氣あり同情に富む模範的實業家を見るは、是れ猶世界に誇るべき大和魂の、嚴然として國民の心裏を去らず、暗黑なる實業界に一道の光明を認め得る所以なり。余が茲に翁の過去と現在との影面を描かんとするも、亦聊か之によつて翁の德をたゝへ、實業界の模範的人物として、各自に此の如き性格を修養せんことを希望するに外ならず。

森村翁の少時

翁は既に喜壽を越えて白髮銀髯なれども童眼にして元氣の旺盛なる、殆ど壯者を凌ぐ程なるが上に、見るから溫厚なる相貌は、人をして欽慕の情に堪へざらしめ、同時に翁の少時果して如何を偲ばしむ。森村市左衞門翁は、天保十年十月廿七日を以て江戸に生る。家は世々武器馬具類を商ひ、專ら土佐藩に出入せり。然れども翁が幼少の頃は家運傾きし爲め、十三歲にして商家に丁稚たりしか、十六歲二豎に罹りて家に歸り、爾來父を助けて專ら家業に從事せり。其時の森村翁は手拭を纏ひて、銀座街頭に夜見世を張り、僅かなる袋物を鬻ぎ、上得意としては土佐藩士の偶々過ぎりて購ひし時の所得なりしと。當時板垣伯の如きも、一個の靑書生として初めて東京に上り、森村家にて草鞋を脫ぎたれば、朱鞘の刀をたばさみ、高下駄を穿ちて翁と共に丼飯を食ひ江戸市中を橫行したる伴侶なるが、一人は政治家として靑雲に志し、一人は商賈として富の成功を期したり。

嘉永年間に米艦の渡來あり、幕府始めて新見氏を使節として米國に派遣せんとするや、米國にては我が貨幣を通用せざるにより、幕府は翁の父に依囑し、我が金銀貨を以て粗惡なるメキシコ銀を買入れしめ、他にも種々の費途に當てんが爲、幕府の御金藏より、數十箱の小判や一分銀を横濱なる亞米利加一番館に送り出し、悉くメキシコ銀と引換へたり。

此實狀を目擊したる翁は年少ながら、慨然として以爲らく、國家の命脈とも云ふべき黃金をして、此の如く容易く外國に流出し、或は兵器軍艦製造の爲め、或は種々の日常裝飾品等購入の爲め、その都度黃金を流出せば、恐く我が金銀は悉く外國に吸收せられて、軈て悉く國内に正貨を見るべからざる悲境に陷らん。斯くて之を輕々看過せば、一國の獨立も到底覺束なく、後日國民臍噬の悔をなすも復た及ばざらん、須らく今に於て之が救濟策を講ずべしと。

翁は此救濟策として、決然直輸貿易の途を開き、有爲の士先づ率先して鞠躬之に盡瘁すべしとなし、是に初めて海外貿易に志を立てたり。然れども此事たる重大なる國家的事業なれば、輕忽に事を擧ぐべきにあらずとて、國家の大勢を先輩早崎哲意、細川潤次郎、桑名登等の諸氏に聞くに、皆曰く今日こそ諸大名の權勢赫々たるも、將來我國の文明進まば必ず大變動を生じて、所謂百姓町人も大名と伍する時期到來すべしと、斯くて更に各國の形勢を聞くに、外國商工業の進歩せるに驚き、我が邦にても當時の憫むべき町人輩の地位を進め、天晴れ外國と對峙して恥ぢざる人民たらしめざるべからずとの希望を起せり。此の精神は各方面より激厲せられたるも、不幸家貧にして資力に乏しく、剩さへ無經驗なれば直に通商貿易を斷行すること能はず、空しく海天を望んで焦心苦慮せる折柄、先きに派遣せられたる使節歸朝すと聞き、卽時に海外の狀況を叩くや、益々海外貿易の急務を覺り、一死以て富國の爲に斯業を斷行せんとの熱度を高め、唯如何なる方法によつて此大事業を仕遂げ得べきか、日夜思慮

を凝らして畫策せり。

兄弟同志協力

苟も大事業を企てゝ之を成就せんと欲せば、先づ之に適當なる人物を選ばざるべからず、人物を得ればその事業に關する細密周到なる調査をなさざるべからず。翁は國家永遠の事業として、こゝに直輸貿易の有望なるを觀破し、決然志を立てたりと雖も、未だ十分海外の事情に通せず、獨り以爲らく、自ら之に任ぜんと欲すれども、全く語學の知識を缺き之を學ばんと欲すれば、一家の糊口を支ふ能はざるを奈何せんと。是に於て翁は己れに代るべき適當なる人物を造らんが爲め、商家に奉公せる實弟豐君を呼戻し、英語を福澤先生に學ばしめたり。翁も亦業務の餘暇を以て、專心外國の事情に通ぜる諸名士と交り、漸く海外の狀況を窺知し、こゝに新事業經營の準備に着手せり。

明治七年豐君業を卒へたるを以て、愈〻準備の爲め、翌年豐君をして斷然渡米せしめ、暫時同地の商業學校に學ばしむ。かくて同八年より紐育に一小店を開き、輸出雜貨商の業を營みたるも、固より資本に乏しく、運輸に不便を感せしかば、豐君は自ら貨物庫を寢所として、太平洋を往來し、外國向きの貨物仕入を翁に傳へて之を輸出し、內地向の物品を彼れより購入して之を翁に渡し、着々販賣の途を開けり。

而して翁の內地に於ける活動は、翁自ら內國各產地に至りて輸出貨物を買入れ、且つ將來の輸出品として何物が適當なりやを考察し、或は職工を誘導して貨物の製作を改良する等、種々手を盡して直輸出を盛にせんことを勉めたるも兎角輸出に適應せる貿易品なかりしは、最も事業の上に困難を感ぜしめたり。

輸出品の仕入れに當りても、今日の如く運輸の利なく、銀行の便なく、通信の途も開けざりを以て、自ら天秤棒大風呂敷を肩にして、京阪地方を往來し、

貨物集れば之を擔いで旅宿に歸り、自ら荷を造り自ら車を推して之を船に積み豐君に渡して米國に輸出せり。此間常に翁の相棒となつて艱苦を共にし新事業を帮助したるは翁の姻戚なる大倉孫兵衞氏なり。氏は後に森村組の重鎭となり、相談役として翁の片腕となれる人なるが、單獨には大倉書店を經營して出版界に成功せるは改めて言ふ迄もなし。今も翁は汽車にて京濱間を往復する毎に、轉た當年の辛酸を物語りて意氣軒昂、常に惰弱なる青年を訓戒せりといふ。

奮鬪時代

翁平生いつて曰く、「余は自己の利益を目的として商業を營まず、國家の富强發展を計らんが爲に、唯商業に最も興味を以てなすのみ」と、此言は全く森村組をして他の所謂成金黨と選を異にする特色あらしむる所以にして、現代の實業家は皆此の如き大主眼の下に奮鬪せば、當然內外の信用を博し、商業の繁盛、輸出の好況を來し。日本實業界の不振を挽回する敢て難からざるべし。

翁は此大目的を以て徐々として事業の發展に努めつゝありしに、明治十二年頃より追々內外人の同業者現はれ、之が爲め自然商業上の競爭を惹起せり。本邦人の競爭者中には、政府より特別保護金數十萬を給與せられたるもの續々輩出し、彼等は此保護金を恃みて資金に苦まざるより、利益の有無品質の精選は毫も問ふ所にあらず、賣買に當つて眞正の商路を踏まず、彼の地の向き不向きを察せず資金の多きに任せて、販路に見込なき貨物を輸送せり。

果せる哉彼等は此賣行の見込なき貨物の所分に窮して競賣をなすあり、爲に市場の定價を紊亂し、獨力經營の森村組には一時大打擊を加へ數年間は豫想外の惡戰苦鬪を繼續せり。豈啻此の如き競爭者ありしのみならんや、さらぬだに當時は彼我の金利甚だしく相違せるに、かてゝ加へて運輸は一も我が國の船舶に依るを得ざりしかば、內地の商業に比して利潤薄弱に、到底事業の見込立た

ず、屢々失望落膽して廢業の已むなきに到らんと迄危ぶまれたり。然れども翁は以爲らく一旦富國の基礎たり、民福の原素たるべきものは、海外通商の外他に道なきを洞觀せる上は、斃るるまで初一念を貫徹するに勇往邁進せんと、兄弟及び同志協心戮力誠意と着實とを以て彼我の需要を供給せしかば、貿易商として最後の月桂冠は遂に翁等の頭上に落ち、卽ち今日の隆昌を見るに至れり。

翁の三主義

現時の森村組は海外貿易を主とし、その取引の大なる本邦に冠たるのみならず、傍ら森村銀行を經營し、眞に國家的事業として、終始一貫せるは、全く翁の精神を組員一同服膺せるによれり。

翁の主義とする所は、要するに至誠と奮鬪と同情との三に歸せるが如し。されば翁は不斷世の爲に正しき道により商業を營み、品質の純良なるものを輸出して、日本商人の信用を博せんと力め、豐君亦翁と志を同くして、明治三十三年七月三十日病を得て遂にその職に斃るゝ迄、千辛萬苦獻身的に米國紐育にあつて活動し、その誠實なる人格に內外人の同情を得たり。

豐君が創業時代の模樣を聞くに、單身米國の大都會にあつて、見る影もなき店を開き、臥するに寢臺なく、貨物函の中に藁を入れて之を寢所とし、一心不亂に國富をその天職とし、太平洋を往復する四十餘回に及びたりと。

森村組にありて最初より翁と相提携したる大倉孫兵衞氏、騎兵長官を拋つて森村組に入り後に森村銀行の頭取たる廣瀨實榮氏、紐育にて豐君の後を繼げる總支配人村井保固氏等も、皆此三主義の精神を以て業務に當れり。而して翁の店員を見るや一視同仁、如何なる丁稚小僧と雖も之を遇するに同情を以てし、常に福澤先生の「天は人の上に人を造らず」といふ訓言を遵奉し、形式的に社長や重役を置かず、而も整然として商店の組織亂れず、此の如く深き同情は總て

社會の各方面にも及ぼし、人をして不知不識翁を欣慕するの情を起さしむ。

翁の家庭

森村家の家庭亦一般實業家のそれと異なり、翁自ら「人間一生働かざるべからず、余は白髮の丁稚なり」とて、夙く起き晩く寢ね、その矍鑠たる元氣壯者を凌がんとす。而して翁が繁劇なる實業界に奔走せる閑を以て、數年來習字に志され、殊に昔は福澤先生に向つて、『時事新報』を總振假名にせざれば、讀むこと困難なりといはれし翁が、後年新刑書を大抵通讀して、驚くべき多讀の人となれりと、その精力の旺盛なる感ずるに餘りあり。

又先輩等の多くは酒に斃れ、煙草のニコチン毒に犯されたるに鑑み、斷然として自ら之を禁じ堅く青年を訓戒せり。それかあらぬか嗣子開作君の如き、年三十有餘にして、實業界一般の弊風に染みたらんには、花柳の巷に浮身をやつすべき年輩なるに、故人となられし長兄明六君と共に紐育のイーストマン商業學校卒業後、在米十年小僧同樣荷造りより仕上げて奮鬪的生活を經、謹嚴にして平生の嗜好は學問唯是れのみ翁の人格を享けたる溫厚の君子人なり。

一家の主惱既に斯の如くなるを以て、高輪南町なる翁の邸に於ける菊子老夫人の如きも、糟糠の妻として內助の功多きは言ふ迄もなきことなれども、是れ亦七旬の老年に至る迄、終始一貫所謂現今の流行を追うて、美衣美食に飽き遊興に耽るが如き惡風を嫌ひ、自ら過去の功に誇ることなし。翁の數百萬の富を以てして、自ら出入に多くの人を煩はさず、家族にも皆質素を旨とせしめ、子女皆自己一身のことは之を自ら處理せしめ、下女下男を願使するが如き自儘を敢てせしめず。翁は又敎育若くは慈善事業をはじめ、公共の爲めに金錢を投ずるを以て樂みとし、現に森村組に功勞ありし豐君と長子明六君の死を記念せん爲め、豐明會なるものを設けて慈善事業の基本金を作り、既に各種の慈善感

化、教育の事業に補助せられつゝあるは、世人の普く知る所たり。

翁の精神は總て斯の如く三主義を以て一身を國家にさゝげ、常に丁稚小僧を教ふるに次の語を以てせり。

眞實の心を盡しうそつかず朝早く起き儉約をせよ

是れ實に戊申詔書の旨にも副ふ所にして、現代の實業家たるものは勿論、一般國民は翁の如き精神を以て、不撓不屈國家の爲め、はた社會の爲めに盡瘁せば、日本帝國は世界各國に信用を得て、國民の幸福は當然實現し得べきなり。

十五　天禀と出世

太閤秀吉はその青年時代から才智があつて勉强家で、それに用心深く度量があつて膽力があつた。その一例を擧ぐれば秀吉がまだ中村藤吉郎といつて、織田信長に仕へた極はじめのことである。今でいへば馬丁の役の御馬飼となつて、晝夜馬草飼の手配に油斷なく勤めて居つた。暇さへあれば一向に馬の總身を撫でさすつたので暫の間に毛色つや〳〵と美しくなつた。信長卿はその丹念に目をとめて、草履取を仰付けられたが寒氣の時節に其草履をどうしたか。彼はさる者、御草履を己が懷に入れて溫め、いざ御召とあつても冷い感じのない樣に心懸けた。是れにも信長卿は感心した。

信長はその頃未だ壯年で、殊に剛氣の大將であつたから、嚴冬極暑にも厭はず早起する。毎朝卯の刻から馬に乘るのであるが、或朝雪が降積つて寒氣が烈いのに、常より早く起きられた。玄關に出ても人影がない、「誰ぞ居らぬか」と召されると、「藤吉にて候ふ」と答へて御前に進む。彼は何日も衆人よりは一時宛早く參り、御出立を待つのであつた。信長は其勤勞に感じた。終に臺所奉行に選出され、諸事冗費を省いて經濟的に處置したから、始めて扶持を戴いた。又或時小牧山の御狩の時、信長卿山中の樹木を數へられ樣としたが、多數の木で混雜して居る。正確に算ふることは甚

だ困難である。藤吉郎は早速工夫した。彼は確かに立派な數學的頭腦を有して居た。細い繩を夥多三尺許に切つて、豫め總數を調べ、それから一本毎に木の根に結びつけた。さて落ちなく結び了つて後、繩の殘數を算へて總數から引き去り、相違なく其數が知れた。匹夫より身を起して天下の覇を握つたのは、全く彼の天稟に加へて不斷の修養を積んだ結果である。

それから他の英雄に比較すると、彼は世人の同情を引くことが甚深い。想ふにその原因種々あらうが、報恩に對する彼の赤誠によるといつて可からう。殊にその赤誠より勤王心の厚い人であつたことは、彼がいたく皇室の式微を嘆き、衷心から朝廷の爲に力を盡したのでも知ることが出來る。應仁の亂以來皇室の衰頽がその極に達し、朝憲の紊亂弛廢譬ふべきものなく京都は屢〻兵燹に罹り市街は荒野の如く變じ、禁闕は實に言語に絶する程荒廢したのである、之を見てゐる彼は君恩の廣大なるを感ずるにつけ、之を默視するに忍びず、大いに皇居を修め仙洞御所を新築するに至つた。それから供御を增し、公卿の祿を豐にし、專ら皇威の伸張を計つたのである。此點から見ても、武將としての秀吉は、凡人に傑出してゐる人格を備へてゐたことが知れる。

十六　熱心と發明

電氣機械發明の世界的元勳エヂソンが、その發明に苦辛慘澹したことは、暑い寒いを物ともしなかつた位でない、寢食をも忘れた程である。彼が貧乏で困つて居た頃、晝の中本業たる職工を務めた後、徹宵一睡もしないで熱心に電氣機の發明に腐心した。

彼が棲つて居る家は、極めて見すぼらしい柴小屋の樣な所で、その所有品は自分の造つた電氣機械より外に、殆ど何物もない。金錢は悉く實驗の爲めに遣ひ果たして鏹一文の貯もなく、債鬼に責めらるゝばかりだ。或日瓦斯會社の集

金人が來て、瓦斯點火料の督促を嚴談に及んだ。

此集金人は是まで度々エヂソンの家へ足を運んだが、彼は自分の發明に熱中して、餘事には一顧をも貸さない。常に頸と手とを横に振つて面倒臭いの一點張で追つぱらつた。所が今日も今日とて金を拂ふ所か、例の面倒臭いの一言で追つ拂つて了つた。

瓦斯會社では此發明家を困らせて遣れといふので、その夜から瓦斯を止めて了つた。發明家先生、今の樣に電氣が瓦斯に代る丈に進んで居ない時であるから、礑と仕事に差支へた爲め、閉口して何卒今夜だけで可いから、瓦斯を使用させて貰ひたいと、百方詫びたが聽入れて呉れない。

彼は燈火を消された一室に、ヅッと端座して矢張電氣機械の考案を默想するのであつた。それが却つて電燈發明の動機となつて、將來彼を困めた瓦斯會社を壓倒する樣な、電氣界の記錄を破り、今日の如き大成功を遂げた。發奮すると恁んな大發明家ともなれる。

十七　富豪の勞働

露國ペトログラードに住んでゐる、一富豪の若主人で、アレキシス・サヴァロフと云ふ人は、父祖の遺產を相續して、極めて有福な生活をして居る。其住宅は三階煉瓦造、四年前に妻を迎へ家族の外に四人の婢僕と、一人の自動車運轉手を雇つて居る、自動車は一臺、馬車も一臺所有して居る。

此若紳士は毎朝六時に起床し、自動車で何處へか外出して行く、此時は夫人にも行先きを知らせない。が意外にも彼は市内の道路其他の掃除請負人の許に行くのであつた。其處でサヴァロフ若主人は、美服を日本で言へば印絆纏股引ともいふべき職工服に着換へ、職人姿となつて勞働仲間に加はる。

恁くして取締人の指揮の下に、或はバケツと箒とを以て、道路や他の富豪の

門や入口を掃除し、些も倦怠の色がない。又或時は荷物配達人となつて、荷車を曳いたり、小包を集配したりする。毎日午後六時迄休みなく働く、その爲取締人から日給四圓を受け取るが、此の自動車の費用にも足らない。夜歸ると衣服を着飾つて夫人同伴娯樂の家庭を樂む。

何故彼はこんな勞働をするのかといふと、人間は勞働をして心身を鍛錬し、體力を增進し健全なる生涯を送るのが自然であり、義務であるといふのである。勞働は神聖であるといふ教訓は、此サヴァロフ氏によつて實地に窺はれる。富豪でさへ斯く勞働に力むるの時勢であるから、普通人は尙以て大に勞働を樂しむ樣になりたいものである。

第二篇　教

一　人人人

大隈伯は常にいふ、「世界的競爭には健全なる國民を要し、高尙なる國民は優秀の兵器に勝る」と。然り、現代我が日本帝國をして、富國强兵の充實を期し、世界列强を相對峙して遜色ならしむるものは、蓋し健全なる國民の努力に俟たざるべからず。之に反して一般國民の品性不健全ならんか。例令最新優秀の兵器幾百萬を備ふると雖も、唯是れ武力の外觀を衒ふ裝飾品のみ、何ぞ國家をして泰山の安きに置くものならんや。

世界の英傑那翁は、全世界を併呑せんとの大志望を抱き、歐洲各國を席卷して向ふ所敵なく、將に大陸悉くその有に歸せんとしたれども、ウォータール

ーに英將ウェリントン、及び獨將ブリュッヘル等の率ゐる勇敢なる軍隊に挾擊せられ、遂に一敗地に塗れてセントヘレナに竄流せられ、數年の後此一孤島に易簀せり。彼那翁は確に一代の俊傑に相違なかりしも、或傳說を眞なりとすれば彼の戰爭に對するや、勝敗を以て人力に據ると思惟せずして、偏に金力のみを重視せしが如し。是れ彼の終りを全うせざりし一原因なりといふを得べきか。

或人那翁に問うて曰く、「戰爭は第一に何を要するか」と、那翁答へて「第一に金なり」と。「然らば第二には」と、彼又「金なり」と答ふ。更に「第三は」と問ふ。那翁又「同じく金なり」と。此の傳說にして將して眞なりとせば、奈翁の眼中金力以外、人力の重且大なるを忘れたるなり。

謂ふに那翁の嚮に勝ちたるは勇敢なる兵士と自己の戰略と、國民の後援よく軍資を給したるに基因せずや。彼の後に敗れたるはその率ゐる兵士の疲勞せるに反し、英獨の精銳が熱烈なる愛國心に激勵せられ、獻身的に活躍したりし、ウェリントン、ブリュッヘル等の智囊より打算したる策戰計畫宜しきを得たると、英獨兩國民の覺醒によつて一致の行動を敢てしたる人力に職由せずや。

此の如く一國を起すも人なれば、亡ぼすも亦人なり。一家若くは或る團體を昌盛ならしめ、或は衰微せしむるも人力によるべきことを知る。而して今の人亦動もすれば、那翁が職爭に對すると同一謬想に陷り、一にも金、二にも金、三にも金と心得、自らその金力をも產み出す、健全なる人たらんことに想到せざるは、抑亦木に緣つて魚を求むるの類か。

優秀なる兵器は如何にして之を得たるか、速射砲の如き機關砲の如き、苟も最新式の火藥武器は、皆是れ科學によつて鍛錬せる人の頭腦より發明せられずや。而して此國家重要物を製するにも之を購ふにも、亦是れ進步せる人智の生產によつて蓄積せる富の力によらずや。之を自由自在に運轉するもの又人にあらずや。是に於てか一にも人、二にも人、三にも人といふの寧ろ肯綮に當ると

いふべく、大隈伯の言は常に我が國民の理想とすべき方針を示されたるものといふべし。

然らば健全なる國民とは何ぞや、余はこゝに大要次の如き資格を具備せる國民を以て健全なりと斷じ、青年諸子が成人して平和の戰爭に參加し、他日最後の勝利を期する準備の標目たらしめんとす。

第一、本分を盡す事。第二、規律を守る事。第三、忍耐なるべき事。第四、自彊息まざる事。第五、常に思慮すべき事。第六、新知識を求むる事。

余は嘗て『人生の激戰』と題する一書を著はし、人の一生を戰爭に擬して論じたることあり。人生を以て不斷に激戰せるものと覺悟し、以上の六條件を嚴守して進まば、恐く向ふ所敵なく、何事に當つも快刀亂麻を斷つの概あらん。

二　自信と修養

一日浮田博士を高田村若葉町の寓に訪問して、談遇々修養問題に及んだ。博士は西洋各國に於て、斷食治療法が行はれ、その實驗した成績が詳細に發表されて居るとて、余に一英文雜誌を示された。一見するとアプトン・シンクレーア(Upton Sinclair)といふ人が『完全なる健康』(Perfect Health)と題して、斷食治療を實驗した方法、効力、注意等に關して、縷々數千言を費したものであつた。古來日本にも斷食の行者が澤山あつて、多年の痼疾が癒つたばかりでなく、生れ變つた樣な强健なる心身となつた例が少くない。それが科學的に論せられて來たのだから、餘程面白く感ぜられるのである。

此治療法は神經病、感冒、胃腸病等、苟も內科に屬する疾病には、極めて著しい効力を有し、殊に慢性病などの、名醫の投藥も殆ど効驗ない樣な病氣

が、此方法で全癒した實例非常に多いとのことである。

尤も此治療をなすには、確乎たる自信と修養とを要するはいふ迄もない。先づ人間は數十日間斷食し得るのみならず、此療法により必ず病氣平癒すとの自信なかるべからず。而して之を始むる二三日は非常に空腹を感じ、大抵の者は耐忍が六ケしく、到底實行出來ないといふのが普通であるから、卽ち此の難關を通りぬける修養が必要だ。

之に反して自信あり修養ある者は、十二日乃至四五十日間の斷食は普通で、永きは七十二日間斷食を實行し、其れより最初は果物の汁、牛乳、ソップの類より食を始め、漸次常食に復する。是に於て精神爽快を覺え、體力增進し、頭腦明晰に、曾て肥滿せるものは痩せ、痩せたるものは肥えるといふ不思議の結果を來すは、シンクレーア氏が他の實驗者と共に證明する所である。

果して之を事實なりとすれば、古昔釋迦や基督が、斷食をなして修養を積み、豁然として大悟徹底したといふのは、强ち怪むに足らぬことゝ想像する。

唯夫れ如上の心身修養を得るのみならず、不時の災厄に耐へ得る利益もある。曾てシンクレーア氏が伊太利に遊びし時、會々メッシナの大地震に遭ひ、市民悉く三日間餘絶食の已むなき場合となつた。そこで市民は皆飢餓に迫つて或は病み、或は死に瀕する許りに苦んだが、同氏は豫て妻子に迄も此修養をなさしめた爲め、泰然自若として一同飢餓に堪へたとのことである。

余は此の一座談に於て自信あり修養あるものは、一時の飢渴に堪へて永遠の祝福を得るとの敎訓を得た。「飽食暖衣逸居して敎へなければ、則ち禽獸に近し」とは、孟子の言であるが、學問を求め、孜々として螢雲の功を積み、確乎たる自信を以て、徐々として修養したならば、明晰なる頭腦、崇高なる識見を領得して、永遠の祝福は期して待つべきことゝ信ずる。

三　進取と保守

人間社會に立つて何事をなすにも、進取的攻勢なるの利が、保守的退嬰に優ることは、戰爭に於ける攻擊の利益にして、防禦の不利なるに異ならぬ。現に軍籍にある人や、又は嘗て軍人であつた人は、屢々敎へられて居るであらうが余の聞いた某戰術家の談を綜合すると、進取的攻擊の利益なること、左の三點にあるといひ得る。

第一、理論上攻擊の利といふのは、彼我兩軍の兵力が等しければ、攻者は防者より强大なる兵力を展開し得るといつてよい。是れ攻者は動くもので、防者は靜止するものであるによる。抑々力は質量と速度とから成るもので、動者は停止者と衝突するとき、其力は停止者に勝るのは自然の原則である。人の天性も學校時代に同一の力量あつた者が、一人は活動的進取的で、何事にも攻擊的であるのに、他の一人は保守的で現狀を守るに汲々して居ると假定する。長年月の間には進取的攻擊的に活動するものは、遂には停止者防禦者を凌駕する。少年時代に餘りこせ〳〵せぬ活潑のものが、初めは溫柔な者に劣つて居る樣でも、年長けて頭角を顯すのは、恐く此が爲めであらう。

第二、精神上攻擊の利なること、此は理論上よりも更に重大な利益で、攻者は自己の前方に當つて、征服すべき目的物を目標として、一歩々々前進する。此進歩の精神が士氣の振張すること、防者のそれと正反對である。日々無事で苦むと、多忙ながら何等かを得て行くのは、氣持が非常に違ふではないか。攻者の英氣は防者に百倍して來る。途中で味方の傷いたり殪れたりする者があつても、前進する眼には見えぬ。斃れて後已むの無畏の精神は、進取者にあつて保守者には多く望まれぬ。防禦者は何物に襲はれるか、常に危懼の念に囚はれる。進取攻勢の極端迄發揮したのは「捨て身の術」で柔よく剛を制するも、此原

則に歸着するといつてよからう。

第三、作業上攻擊の利といふことは、攻者は攻擊の時機方向、方法等を隨意に選定し得る、隨つて機先を制するの利がある。然るに防者は唯だ攻者の意圖に應じて動かねばならぬのであるから、機を失し易い。

農家の人が先祖から讓られた田地を失ふまいと、之を徹頭徹尾保守する。勿論之が本據であるから大切には相違ないけれども、進取的精神を以て開拓し增殖せぬと、生產と消費と伴はなくなる。高價な肥料と勞力とを以て、昔丈けの穀物を收穫するに過ぎぬとすれば、漸次滅亡に頻せざるを得ないのは當然である。

商人であらうが、工業家であらうが、學者であらうが、進まずんば則ち退くので、事業の經營も現狀を維持するといふのでは心細い。周圍の進むに比すると退くも同樣ではないか。年老いて戰鬪力が盡きたものは兎も角、これから發展しようといふ前途多望の青年は、自己の地位境遇の上に立つて作戰し、適當なる時機に目的に進むべき方向を考察し、最良の方法によつて常に歩一歩前進すること、恰も戰爭に於ける如くでなければならぬ。

四　早起の德

Early to bed and early to rise, Make men healthy, wealthy, and wise.

「早く寢ぬ夙に起るは、人をして健康、富裕、且つ賢明ならしむ」とは、西洋の諺であるが、我が邦の俚言にも、「朝起きは三文の德」といつて、昔から早起きは利益としてある。然るに兎角無性者は「春眠曉を覺えず」などゝ、優柔不斷の寢言に憧かれ、毎朝の爽快にして新鮮なる清氣に背くものもある。が、斯る輩は到底精力旺盛なる青年と伍して、生存競爭場裡に角逐することは出來まい。身體の健全は勿論のこと、將來の富貴榮達は望むべくもない。

田園に住む者も、都會に生活せる者も、若し將來健全にして有爲の人物となる希望あらば、必ず早起の習慣を作れ。東京で電車に乘るにも七時前に乘ると、九錢の電車賃が五錢ですみ、而も一日の仕事は懶惰者の朝飯前に三分一を仕上げて了うのみならず、精神爽かで終日愉快の感じがする。それが若し病身でも早起冷水摩擦を實行し、適度の運動でもしたならば、健康を恢復し、頭腦は明晰となる。又た此の朝の時間を獨學に利用したならば、毎日四時から六時迄二時間之を一個月に積れば六十時間、一個年繼續すると七百二十時間の勉强が出來る。して見ると一生涯には如何に其利得を生ずるか。昔ナポレオンは百萬の兵を指揮するに、僅か四時間の睡眠丈で疲勞を覺えず、今また森鷗外漁史は事務の外に讀書と創作とに耽る爲、常に三時間の睡眠で足ると。彼も人であれば我も人である。心懸けと修養とで早起きの習慣を作るのは左程六ケしくはあるまい。

嘗て浮田博士の談によると、人は五時間さへ熟眠すれば足りるので、それ以上は床中にあつて熟睡せぬ時間であるといはれたが、實際朝寢して居る人の多くは、夜眠られぬといふ不健康か懦弱のもので、勇氣のない證據である。苟も將來常人より傑出しようとする青年は、此西洋の諺に含める意義を心に銘し、他日の成功を、此の早起により得る時間から產み出さんことを望むのである。

五　豐年を戒む

油斷大敵　作柄が一莖九穗の瑞を示し、未曾有の大收穫なりとの見込のついた豐年は農家にとつては勿論のこと、都鄙一般の經濟界にとつても、慶賀すべき極みであると信ずる。恐く年々打續いた不景氣を恢復し、窮苦に迫つて居る農民や、地方の諸商人等もこゝに一息つけるだらうと、只管稻穗を眺めて笑壺に入つて居るだらうが、併しながら油斷大敵である。

米價低落　言ふ迄もなく增收の結果は、米價が低落する。こは農家で先刻御承知の筈であるが、兎角油斷して後悔するものが十中七八、今迄は賣りたくとも品がなかつた。然るに折角賣らうと思ふと安價と來ては、增收の甲斐がないこととなる樣であるが仕方ない、唯安いにしても比較的値の出た折を見て、賣販く用意が肝腎である。

當事危險　當て事と何とかは向ふから外れるとは古來の經驗が證明する俚諺であるが、いざ向ふに一攫千金といふ樣な當て事があると、忽ち大陽氣になつて前祝ひをやる。そこで外れる方は忘れて了うのが人情の弱點、まだ〳〵刈上げて乾して、粒にして碾いて、籾を篩つて、米に仕上げる迄は容易でない。その中に如何なる天災人厄が來やうも知れぬ、隨分天然も惡戲を演る、東北の不作は、如何も今一息といふ土俵際で、氣候の變動から無慙な目を見た。又た惡辣の實業家が米の相場を狂はせる。前祝をやつた冗費の穴があいた上に、埋合せが附かぬといふ不幸を見るのは、決して策の得た遣り方でない許りか、頗る危險千萬である。

其救治策　けれども豐年は一時總ての方面に活氣をつける。現在の不景氣を多少良好に向はしめよう。外國米の輸入を防遏するのみでなく、外國に輸出する勢となれば、尙以て好況を見るであらうが、それも豐作丈の原因で望むべからざることで、所詮豐作は一時樂觀すべきことにしても、其後に來るべき悲況に對する救治策が必要である。乃ちその救治策の方法は、地主、小作人、商人各々の立場より一概に論ずべからざるも、米價を暴落せしめず、相當の價額を維持して好氣配ならしむるを要するのは、豐年を戒むる根本的通則であるが、人間社會の事々物々に對しても、此訓戒が適應せらるゝのである。

六　誤解を慎め

恐るべき誤解　世の中には有形無形、自然的人爲的の畏るべきもの數限りないが、就中誤解は人間社會に於ける恐るべきものゝ隨一であらうと思ふ。何となれば吾人の最も大切な生命も、縄の誤解によつて失ふ例し少なからぬ。平和も幸福も屢々これによつて破られ、名譽も財産も是が爲に毀損し、往々社會に紛亂を惹起す大原因ともなる。

無智と誤解と悲劇　一家の不和や朋友間の衝突などは、多く相互の誤解や感情の行違などに原因する。古來の歴史上に現はれた人生の悲劇は、大抵此の誤解に基かぬものがなく、更に之を熟考してみると、各人の無智不明から自他の眞相を洞觀することが出來ないで、誤解に誤解を重ね悲慘の淵に沈む順序となる。

楯の兩面を見よ　西洋の "Look at the both sides of shield." 「楯の兩面を見よ」といふ諺は昔嘶の二人の武士にばかりあることと思つてはならぬ。現在我々が常にかの武士の金銀兩面の楯たるを研めずして、互に爭うた樣な淺墓な誤解をすることが實に多い。此は全く思慮分別の知識が乏しく、研究が未だ徹底して居ないからである。是に於て學問が必要であり、社交上にあつては意思の疏通が大切な次第である。

目的方針を誤る勿れ　過去の誤解は將來を戒むる鑑ともなるが、未來の目的方針に關しては甚大の注意を拂はねばならぬ。蓋し此の誤解には物に對すると、人に對すると、自己に對するとの三がある。誤つた天氣豫報を信じて明日は晴天だからといふので、雨具を用意せずに他行する。さあ途中で大雨雪に遭つた時の難儀は如何ばかりであらう、一日の行事でさへこれであるから、一生の天氣豫報を觀測して、常に其不測の災厄を免れる準備をすると否とでは利害得失

果して如何であらう。

自己を誤解する例　他人に接して其人を見誤らぬ樣な見識、物事を前見する の明を持つことは、社會に立つて留意すべきことであるが、更に又自己の價値を知ることが肝要である。希臘の聖人ソクラティースは、アテネの一青年ユーシデマスといふ者が、自らその博學多識に誇れるを、例の反語法で論破し、彼れ自ら一知半解のものたることを覺醒せしめた相であるが、青年には兎角ユーシデマス式に傾き易く、自分を誤解して青年の本分を盡さぬものが多い。

時代の青年に望む　昔楊子は岐路に立つて、其南すべきか、北すべきかに迷つて泣き、墨子は練絲を見てその黃色にも、黑色にも出來るが、その何れを選ぶべきかに惑うて泣いたといふが、吾人は之に同情すると同時に、現代の青年に望む所は、寧ろ彼等の如く泣くことなく一度自ら目的を選擇したる上は、その方針を誤らぬ樣、傍目をふらず全力を盡して研究しつゝ進まんことである。然すれば必ず人生の究竟目的を達することを得べく、誤解が研究によつて明瞭となるは必然である。

七　修養實話

苦心と熟達

法學博士和田垣謙三氏は、有名な經濟學者であるが、又英語の先生としても有名である。然るに今から二三十年も以前、まだ英語を少しも知らないで、英國へ行つた時に、玉子が欲しくなつたが eggs といふ詞を思ひ出す事が如何しても出來ない。そこで忽ち一策を案じ、早速ハンケチを丸めてお尻の邊にあて、コケコッコーと鳴いたので、遺憾なく目的を達し得たといふことであるが、こんな苦心をして學んだから、後には外國人などゞ自由自在に會話が出來る樣に

熟達したのである。No guins without pains.（苦痛なしに何物も得られぬ）といふ格言は洵に眞理である。

平和と非常

忙中小閑を得たので、上野から汽車に搭して一泊がてら、水戸の『いばらき新聞』主筆たる親友五陵兄を、その寓居に訪づれたのは、明治四十三年霜月五日の夜十時頃であつた。久濶だといふので夜の更けるのも忘れ、二時頃迄語り續けた。暫時微睡んだと思ふ間もなく夜が明けはなれて、日本晴れの小春日和、朝飯そこ〳〵水戸義烈兩公の遺跡を偕樂園に案内されて行て見た。有繋に三百年間副將軍として諸侯の上に座し、文武兩道を皷吹せられた規模が偲ばれる。殊に注意をひいた遺物が數多あつた中、長で尺三寸、徑四尺八寸の陣太皷があつた。皮には龍の模樣が極彩色で畫かれ、その胴に金字隷書で烈公の擇んだ次の語が書いてあつた。

震天動地。起雲發風。三軍踊躍。進思盡忠。

此陣太皷は烈公が平和の時にも武を忘るべからずとて、將軍に請うて年々甲冑に身を堅め、追鳥や狩獵をして志氣を皷舞した時に用ひたものであるが、人は平和の時にも非常の時を忘れてならぬとの教訓を垂れて少からぬ感に打たれた。

武士道三則

一日我が武士道の粹ともいふべき柔道を見るべく、小石川區下富坂の講道館に立寄つた。この道場は百疊敷もある大廣間で、そこには午前七時頃のことであるから、十數組の試合が或は組み、或は投げ、或は足に絡み、或は頸を締めて、上になり下になり、各々技術を盡して居る勇ましさ。壇上嘉納館長の門弟に示す三則が次の如く掛物に書いてあつた。

人之生、斯世ニ不可徒費精力。宜本天性ニ隨境遇ニ察國情。以就崇高之業。此之謂立志。志既立矣。然當其行之苟有害人禍國者。則反不如不行之。爲勝之敢行之貴必得其正。此之謂擇法。志立法得而怠於行之亦難成功。故宜自强不息以遂所期。此之謂竭力。是三者。治己處世之要件。爲人者不可頃刻忘之。

宰相の器量

ロンドン・タイムスから先年我國に來たチロルが、我國に滯在中日本の一友に向つて曰く、「何處でも一國宰相の器と云ふのは、共通の性が無ければならぬ。幾ら技倆があつても識見があつても、それ丈けで宰相となり得らるゝものではない。我英國でいへばチェンバーレン氏の如き其技倆其識見餘りある人ではあるが、どうも宰相の器ではない。サルスベリー卿の如きは何となく宰相たるの器を備へて居る。其差はつまり宰相たる人は何處かに餘裕があつて、其上ぽつとした所がある。チェンバーレンの方は餘り切れすぎ要領を得すぎる。何處を叩いても少しの隙がないと云ふ點がある。卽ち此點が却て宰相の器でない所であると云つたが、何事に於ても人を統率するものは此器が必要であらう。

運根鈍の用

大内青巒居士曰く「人は皆運根鈍の必要なることを說けども、鈍の意に晦し。曾て故勝海舟翁を訪ひ、横井時雄と入れ違ふ、海舟翁横井時雄を評していふ、彼れの父小楠は鈍なり、薪も割れ楊枝も削れるか、彼れは剃刀なり、薪は割れずと、鈍の用茲にあり」と果せるかな、横井時雄は利れ過ぎて、遂にその父祖の名を汚した。謂ふに人は第一に運があり命がある。他の幸運を見て羨むべからず、自ら其所に安んじて足るを知らなければならぬ。第二に根氣である。德

川家康の如き根氣あるを要す。急がずせかすといつて小成に安んじない。第三には餘り利れ過ぎ小才子的ではいけない。自ら鈍を鈍として自重し、利に走り功名を是れ事とすべきでないといふのは、自他に危險だからである。運根鈍の教訓は確に青年處世上銘すべき格言である。

八　是れでもか是れでもか

大正四年一月廿五日の日曜日に日本畫家八人と、繪畫に關する教へを乞ふべく高田博士の邸に推參した。畫家とは早稻田大學で毎月研究會を開催せる紅綠會同人で、山口蓼舟、大智勝觀、筆谷等觀、藤岡紫峯、綱島靜觀、移川浩哉、秋野靜外、竹下舊俊の八人、それに余が加つたのである。

博士は凡ての方面に於て教育家である。繪畫に對する趣味と鑑識とは、その道の本職を凌ぐ程であつて、常に畫家中の新進作家を厚遇し啓導せられるが、此日は又特別の優遇で、午前九時から午後四時迄博士自ら所藏の重なる新古幅畫七十六點を取り換へ引き換へ展觀せられた。

博士夫人も亦繪畫に趣味を有つて居られるばかりでなく、時には自ら丹青を凝らされ、閨秀畫家としても錚々たる中に入る程の伎倆がある。けれども謙遜なる夫人は、決して之を口にせられたことがない。此日夫人は書生を相手に畫幅の出し入れを宰領せられ、時には品評もせられる熱心には、畫家一同と共に恐縮せざるを得なかつた。

さて所藏中最も多いのは近代のでは橋本雅邦の筆、古い所では狩野法眼各代の有名な元信や探幽などのもあつた。又雪舟、光起、抱一、山樂、文晁、幽谷等のも少くない。現代のでは栖鳳、觀山、廣業などの腕を振つた傑作があつて、畫家の參考には此上もない絶品ばかりである。

八人の畫家は「此は佳い」とか「此の作圖は面白い」とか「此色彩は鮮かだ」とか

「氣分の好い筆だ」とか感心して時間を忘れてスケッチするのも數多かつた。高田博士は一々説明せられて、その間に畫家の心得となるべき品評をそれ〳〵試みられた。畫家一同も成る程と感心して、非常に有益な一日であつたことを喜んで歸つた。

その畫家に教訓せられた博士の談の中に、此話こそ自分も忘れてはならぬと思つたことは外でない、小説の作家で明治の大立物であつた、尾崎紅葉の心懸けに就てである。

紅葉山人がその他界する三十七歳迄に、小説を著はすこと殆ど等身の多數にもなつて居よう。彼は構想に苦心して稿を起す。それから行文上の洗煉は實に甚だしく、原稿を見るも何處から何處に續いて居るか、他人には得て讀めない程添削推敲に力められる。それ位心を用ひて創作を讀書界に公にする。すると批評家は待つて居ましたと云ふので、批評家自身餘り眼識がないくせに、知つた風で盛んに非難したり、缺點を指摘したりする。

由來小説家とか俳優とか美術家とかいふ、一般藝術家などには神經質のものが多い。批評家が惡評でもすると直ぐむつとして、何も知らぬ癖に誤つた批評をして居るなどと、大に癪に障るものが普通である。紅葉などは自分が確かりした頭腦があり、筆は勿論達者であるから他の肯綮に當らない批評に對し、速に辯解しさうな者であるが、彼は嘗て一回も辯解を試みなかつた。然らば人の批評を等閑にして居たかといふに、中々等閑所か如何なる一寸した批評も見逃がさず、之を蒐集して、自己の參考に保存して置いたのである。

で、彼は新作をなす毎に、批評の大に當れりと思ふ點には意を注ぎ、「さあ是れであつたら何うだ」といふ風に事實の上で前の缺點を補つて行く。第二の作でも非難を受けると、今度は又新に第三第四の創作をなし、「さあ是れでもか是れでもか」と、自分の非難さるる隙のない迄に努力し、女々しい申譯などは一

言半句もしなかつた。彼が明治の文豪となつたのは、全く此「是れでもか是れでもか」といふ大奮闘努力の結果と言はねばなるまい。

近來は文部省が、公設の展覽會を催ほすので、都鄙ともに繪畫の趣味勃興し、隨つて畫家として世に立つものも多くなつた。畫家が多いだけ傑出するには非常なる手腕と努力とが必要で、文部省展覽會の採否何如によつて、その畫家及作品に高下が着く、而して畫そのものゝ價値よりも、作者の名に拘泥するといふ弊害すら生じて來た。是は眞面目に畫を鑑賞する上から、頗る憂ふべきことで、畫家の研究上にも採らざる所であるが、致し方がない。

併し何事に於ても紅葉山人が自分の著作に對する批評を、虚心坦懐に受け納れて、自ら研鑽の資料とした如くに何人も平生の心懸けをなし他人の忠言や非難を決して徒事にせず、又漫りに憤怒を以て迎へるが如きことなく、非難を受くる毎に深思熟慮して後事を謹み、「是れでもか是れでもか」といふ精神で進むのが肝腎であると、是れ博士の畫家に話された中、最も余の心を感動した一話である。

九　假性睡眠

一葉落ちて天下の秋を知るといふ古人の語も、一波動いて千波萬波を起すと形容した諺も何れも事實にして、歐洲大戰亂の如きは、實にその適例といはねばならぬ。此小事大事は各個人に於ても常に免れぬことを覺悟して居らねば、いざ鎌倉といふ場合に鈍刀痩馬、而も名將なくしては役に立たぬ。戰場に臨んで功を立てるといふのは、人生の痛快事ではあるが、自ら必勝を期する伎倆なしに、此光榮を擔ふことは不可能事である。

我國民は戰爭に於て世界に誇るべき伎倆を有つて居る。けれども殖産興業や學術技藝に於ては、一部の少數者を除いては、到底歐米列强に敵すべくもない

のである。カーテーといふ一博士は日本人中に假性愚鈍のものが多い、卽ち注意力が減退して思想の聯鎖が緩漫に、且貧弱の狀態にあるといつて種々の實例を擧げて證明してゐる。

その證據として擧げた一二を示すと、日本では汽車の中又は電車の中で、乘客の四分の一又は三分の一は假性睡眠、或は高度の睡眠狀態を演じてゐる。然るに歐米では此狀態を殆ど見た事がない。日本人が日々の生活上よく物忘れすると言ふことは、矢張り右の假性睡眠に關聯して居るに違ひない。

又日本人は注文約束等をして置きながら、それを守らぬ事が甚だ多い。物忘れの多いことは警察統計を見てもよく判る。千九百十二年の警察統計によると、忘れ物の數が七萬四千箇以上に達し、屆け出たものが僅に一萬八千五百四十四件にしか過ぎぬ。それは大阪に於ける事實で、日本に火事の多いのは一つは此假性愚鈍の原因もあらう。

それから日本の市街を歩いて見ると眞直に歩かないでZ字形に横曲りに歩いて半分睡眠の狀で居るものが澤山見られる。人に物事を命じられて、其事柄がよく分らぬのに機械的に「ハイ」と返事して、忽ち何をしてよいか解らずに困る傭人召使等が多くある。又出入に際し、日本人が戸障子を閉めることを忘れることは、決して珍らしい事でない。

カーテーがいへる此等の事實は、吾人の强ちに否認すること能はざる所で、殊に無敎育の人には最も此缺點が多い樣である。產業の不振等は此注意力の足らぬ假性愚鈍が、どれ程影響してゐるか知れないと思ふ。一面には普通敎育が足らぬから、凡てに對して新工夫がない。唯同じ事を年々繰返してゐる丈であるが、それでは駸々として進む社會と競爭したり、いざといふ場合に他を凌駕することは六ケしい。何時迄もカーテー博士の誹りから免れる理由を見出し得ない。

而して今や世界の大戰亂は他國の工夫によつて出來た物品や機械を當てにして居られなくなつて、獨逸製の如き最も優秀なものが、全然輸入せられなくなつた。そこで內國製使用の奬勵となつたが、さて需要を充たし從來の輸入品に劣らない迄には、中々一朝一夕に發達進步するものでない。よし少し許り高價に出來ても、一般の利益にならぬから、國民の多數が各奮つて智能啓發に力めねばならぬ。

十　人心のパテイ

パテイ Putti といへば、工業に從事して居る人は誰でも熟知せる、硝子や金屬などの接合劑の名である。硝子窓であつても、此パテイによつて空隙を塗閉しないと、隙間から雨風が吹き込んで來る。其では折角の硝子窓の用をなさない。そこで亞麻仁油と白墨とで製したパテイで、キシンと押へる。さあ暴風が吹いても橫降りでもビクともしない。

瓦斯管や水道管は尙ほ以てパテイが大切だ、パテイが利かない爲に少しでも間隙があると、瓦斯が洩れて臭氣を發し危險だ。水が臺所を洪水にする等は珍らしくない。鉛丹と亞麻仁油で、此危害を防遏する。

人心にも此パテーが大切である。「百日の說法屁一つ」といふ俚諺は人心にパテイを塗用することを怠つてはならぬと戒めるのである。多年の苦心も一朝の過失で無効となつて了ひ。百里の長堤も蟻の一穴より崩れる。學問は人心のパテイで、學ばなければ人事百般の要點が押へられない。空隙が生じて貴重な人心の締括りがつかなくなる。

大工でも左官でも、工夫でも此學問で仕上げたものは、棟梁株親方株になれる。學問のパテイが利いて居ない、所謂間拔では安心して建築やその他の工事を全任する譯にはいかない。勿論學校に入らないでも棟梁株、親分といふ樣な

人は、實學、聞學問と經驗とを積んで居る。何處となく拔け目がない。パテイが利いて居る。

少年青年の中から將來有爲のものは、何事にもキビ〳〵てし隙間がない、緊張して點の打ち所がない。パテイで要所々々が押へてある。之に反して低腦兒や懶惰の少青年はボンヤリして其日々々を空費し、一向纒つた事が出來ない。食つたものは口から尻に、見たものは右の目から左の目に、聞いた事は左の耳から右の耳に行き拔け、遂に一生得る所がなく、爲すことがなくして終る。余が手にパテイを握つた時に、是れだ!!!　是れだ!!!　學問をしたり修養するのは、恰度硝子窓にパテイを塗るのが、必要なのと同じだと感じた。

十一　雲雀の巣取

司馬溫公の勸學歌に「養レ子不レ教父之過」とござりまするが、教へても之を修めぬのは、是れ子たる者の過と申さなければなりませぬ。凡そ人には天性がありまして、支那の太古にも愚かで頑固な瞽瞍の子に、舜の樣な大聖人が生れました。我が戰國時代の甲斐の武田にも、親の教へざるに自ら修めて、遂に武門の譽を世に傳へましたのは、誰あらう信玄その人でありますが、その幼年時代から凡人に優れて居たといふことは、流石に栴檀は二葉より薫しとでも申すものでございませうか。

信玄は幼名を勝千代丸と申しまして、大永元年辛巳の歳三月二十八日、父信虎甲府に凱陣の折に誕生せられたので、戰勝に因み、幼名を勝千代と號けられました。乳母傅士日を重ねて養ひ奉り、御年八歳に成り給ふ時、能書の聞えあつた禪宗長善寺の和尚に隨つて書法を稽古せられました。所が筆法はやく天然の妙を備へ、筆一たび落つれば龍蛇の勢ひを模し、書籍など讀ませまゐらすに、一度習ひたることは決して忘れぬといふ良い記憶でありました。或時和尚

は『庭訓往來』といふ書を取出し、此は北畠玄惠法印といふものゝ著はした書、君には之を讀み覺え給へといつて敎へられますと、僅か三日間に覺えて了つた。それのみならず、稚な心にもその意味をさとられたと見えて、此は亂世の急務とするものでない、願くば兵を用ひ國を治むるに便となる良書があるならば、それを敎へよと宣ふに、師の和尙『七書』とて六韜、三略、孫子、吳子、司馬法、蔚僚子、唐太宗問對等よりなる七部の兵書に就き、五事、七計より攻城、野戰に至る迄敎授をした。勝千代丸之を學んで、千金の寶を得たるにも增し、雀躍りして喜ばれたとのことである。

勝千代君九歲の春陰曆三月のことでございます。折から靑麥の中に雲雀の巢を作る時節であるから、近臣ども巢を探つて雲雀の子を捕らうといふので、勝千代君の御供をして野外に出ました。時しも彌生の始めで麥隴は蒼々と茂り、如何にも長閑な時候であります。雲井に昇る雲雀の聲此處かしこに響いて心がときめきさわぐ、近習の壯士や御伽の小童どもは、各自に麥田の中へ駈入り、それ其處よ此處よと雲雀の巢を探し求めるが容易には取り得ない。近臣中多くて二つ三つを探り獲た位、他は一つも取らぬのが多うございました。然るに幼少なる勝千代君は、はや時の間に廿巢ばかりを、何の苦もなく搜り取られました。近臣等みな〳〵不思議の事に思ひ、若君が雲雀の巢を退治するには、如何なる妙計の候ふぞと尋ねましたのに、勝千代君莞爾と笑ませ給ひ、「丸が雲雀の巢を狙ふ方法を聞きたいか」と、下のごとき意味ある說明せられました。

それは外でない。凡そ鳥獸の類は至つて賢い樣でございますが、又至つて淺はかな愚かなものであります。空より下る時は人の己が舞ひ下るを見て、其巢の探り取られるのを恐れ、態と遙かな地に下り、それから麥の中を潛り廻つてそつと己が巢へ歸ると見えるが、其子に食を與へて後には、再び餌を漁り與へようと思ふ親の心のせくまゝに、巢の邊から直に舞ひ上るに相違ないと、不圖

勝千代君の賢い心に思ひ浮んだのである。そこで若君は雲雀の舞ひ下る地を伺はず、ひたすら飛び上る所を伺ひ、その所をよく狙つて一々探り見るに、果して何れも其邊に巣があつたのである。近侍等の一二を求め得る間に、勝千代君の二三十を得たること豈啻雲雀の巣のみでありませうか、學問にも、戰ひにも斯る方法を先づ案じて、然る後事に當つたから、遂に常人を凌ぐに至つたのでございませう。九歳の少年が此の非凡なる天賦の思考力と、後に父信虎に虐遇せられたのは、却つて信玄をして武將たる資性を涵養するに至らしめたので有ませう。かく思考を凝らして事に處し、よく艱難に堪ふるものは、遂に偉業を成し就げるものであります。

十二　自敬の意義

自助自尊自敬　三宅文學博士は自助自敬自尊の各語が、同人社及早慶二大私立大學で用ひられて來たことを論ぜられた。成る程同人社を設立した、中村敬宇翁はスマイルスのセルフ・ヘルプ（Self help）を譯して『自助論』を公にし、自助の語を廣め、福澤翁は自立自尊を稱へて自尊の語を鼓吹し、我が早稻田大學の大隈伯や高田博士は、學問の獨立を敎旨として、自敬を說いて居られる。

三語の比較　此等の三語は大體に於て異つたものでない。が自助はセルフヘルプの譯語で、此は英國で誤解したものがあり、自ら助けるが人を助けぬといふ、利己主義と解し著者が頗る迷惑を感じた相である。自尊と自敬とは原語にすると共にセルフ・レスペクト（Self respect）に相當するが、三宅博士の說の如く、自尊は自ら尊大にするといふ樣に、誤解せられる恐れがあるから、自敬とするが可いと思ふ。

自重自覺自我實現　自敬といひ自尊といふも皆これ自ら尊び敬ふの義で、昔からある漢語の自重、又は佛敎の自覺といひ、天上天下唯我獨尊等といふも、

その眞意は同一であるまいかと思ふ。殊に新しい語で自我實現といふのも畢竟は同じく、自分は本來何ものなるぞと自ら顧みたならば、如何に重んずべく敬ふべきかを感じ、「我は人なり」此人格は世界に生存するものゝ靈長であることを悟り、かくして自己を尊敬するが如く、又他人の人格をも尊重し、猥りに輕視すべきでないことを思はねばならぬ。

三省し學習せよ　孔子の高弟として後人より尊崇せられた曾子は、此自敬を實行していふには、吾日に吾身を三省す、人の爲に謀つて忠ならざるか、朋友と交つて信ならざるか、傳へて習はざるかと。又孔子は學びて時に之を習ふ亦悅ばしからずやといはれたが、學を修め之を實行するのが面白く悅ばしくなつて、初めて自敬自重の實工夫が出來る樣になつたので、こゝに自我實現の第一義を全うすることが出來る。

十三　成功の第一歩

大正三年高田博士の歐米視察に當り、かの地の校外教育に關する調査もせられ、之を追々我が邦にも試みられようとせられてゐるが、併し偶然にも既に我早稻田大學で、先鞭をつけた點なども少くない。故に今日の我が通信教育や、講習會等に改良を加へると、校外教育に於ても決して歐米各國の大學に遜色のないものとなるであらう。余は博士の齎らし歸られた海外の通信教育に關する報告の一二を讀んだが、海外での通信教育は非常に盛んなものである。

市俄古大學では通信修學部といふのがあつてそれは校外教育普及部の一科となつてゐる。卽ち講演科に對し、通信教授科となつて多くの學科が通信により、有効に教育せらて得ることは直接講師が、言語を以て教授するのと、經驗上同樣の成績を擧げ、頗る有効であることを明言してゐる。殊に通信教授の方法に

依るときは、學生の自主、自發、忍耐、正確其他之に類する諸種の性質を涵養し發達せしむるを得と報告せるは、大に注目すべき點である。

その目的として記する所によると、市俄古大學通信修學部に於ては、校内にて教授する各種學科と同樣な學科殆んど全部を、此通信の方法によつて教授するが故に、正則に學校に登り學ぶ能はざる人には、乃ち之により研究し得べく、且つその學科は悉く日常の活問題に接觸せしむるに努めつゝあるから、直に以て實際的事件に適應し得るといつてゐる。要するに彼の目的も早稲田大學と同じく、普通教育より專門教育に至る迄、何人も坐ながら專門大家、教育家の有益なる教授を受くるの機會を得しむるに在るのである。

修業後の待遇等も早稲田大學と略類似してゐる。卽ち修業證、認可證、卒業證、大學に轉ずるの特待もある。又英國の倫敦大學に於ける校外教育には、大學普及協會があつて地方講演があり、又出版物として講義、論說、著作を頒布し、一般市民をして業務に從事せる餘假に大學教育を受くる奬勵をなし、此大學でも他の劍橋大學や牛津大學と同じく校外教育が盛に行はれてゐる。その教育の方法等に關しては非常に巧妙なるものがあるから、我が邦に行はれ得るものは、之に倣つて實行したいものである。

米國には又萬國通信學校といふものがあつて、中學より各種專門學校の總てに相當する講義錄が英文で發行せられ、千八百九十一年に第一回の修了生を出し、千九百八年に十萬七千人を算する卒業生の名簿發行せられ、三十二萬五千人以上の修了者を出したと號して居るが、兎に角通信教育の效果が成功の第一歩となることは、此等の修了者の多きを以ても證せられる。

其通信學校の規則書に通信教育の必要を說いていふには、「何人でも其生涯に最も大なる關係ある二つの步調を捉へる。其一は先づ如何なる事に從事して生活を營むべきかを決定するの步調で、他は其決定したる事に從事する準備を、

如何にして爲すべきかを決定する步調である。此兩步調は何れも重要であるが、後者は前者よりも遙かに重要である。人の成功は此兩者の決定如何によつて定まるが、特に其人が選定した職業に對する準備の如何は、成功と否とを定むる最大の要件である。」といつてゐるが、確かにその通りである。

今日に於て成功するには、決して僥倖ばかりでは到底不可能である。成功者は何れも現れ來つた機會を、捕ふる準備を前以て爲した人々ばかりである。換言するとそれらの人々の成功は、實に先見と熟慮と研究から生れ出でた結果で、決して偶然でない。則ち如何なる方法順序を以てすれば、成功の彼岸に到達し得るかを綿密に考究し、其定めた方向に向つて努力を集注した報酬なのである。故に成功の秘訣は實に機會に對し、これに乘するの準備を自ら爲し置くことで、獨學自修は卽ち此準備に對する第一步に外ならぬ。

第三篇　文

一　國民讀本を讀む

明治大正の聖代に生を享けたる帝國青年は眞に多幸なる哉。文武農工商の子弟より、賤樵夫海人の伏家にも咿唔の聲を聞かざるなく、人として一般に缺くべからざる普通知識は、之を求むれば必ず學修するの途あり、立志向上の精神を持して奮勵せば、何事をも大成し得るは誰か之を疑はん。然りと雖も今日の教育は餘りに智育を重視し、國民教育の根柢たる德育の大本を閑却せり。

嘗て大隈伯は、多年の苦心を經て此一大缺點を稗補する目的の下に、卽ち『國民讀本』の著あり、卷頭伯自ら序して曰く、「國民讀本は大日本の國體と、國民性とを闡明し、現時の法治國に於ける國家組織の綱領と、國民の責任とを概

説し、また忠君愛國の新意義を指示し、兼て日本國民の理想を顯明せり。」と、何人も之を繙かば、伯自身の宣言せる旨趣を以て全篇を貫けるを知らん。題辭には御歌所長たりし故高崎正風男の謹寫に成る左の御製御歌を奉掲し、各章にも亦御製御歌を冠して伯が、聖旨を拜し之を敷衍するに過ぎざることを明にせり。

御製　いその上ふるきためしを尋ねつゝ新しき世のことも定めむ

御歌　しろしめす國とまさむと千萬の人皆わざを競ふ御世哉

先づ第一篇に於いて「大日本の國基」と題し、日本國家成立の二大要素を「天壤無窮の皇室」と「國民の資性」とに歸し、至誠、忠君、愛國、孝悌、友愛、廉恥、好潔、同化の性を稟けたる敷島のやまと櫻は、先づ此の二大根柢より發芽せるを説き、第二篇に於ては「大日本帝國の發達」と題し、豐葦原中津國、封建時代を經て、其幹枝の蓊然として繁茂し來れる所以を叙述し、第三篇「今上の御親政」に於て此大樹は燦爛たる美花を開けることを明にせり。その收むる所明治維新立憲政體の創始、立憲政體、行政の機關、法律の擁護、國家の兵備運輸及通信、國家の交際、國家の財政、國家の富源、國家の膨脹、國民の教化に至る迄、苟も明治聖代の國家組織に就て、國民必須の知識は悉く網羅し、而もその叙述最も簡明を極め、字々皆是れ金科玉條、而も第四篇は「大國民の理想」と題して一、二、三篇の叙説より自然の結果として、勢ひ到達すべき國民の義務個人の責任より、家族の和合に説及し、進んで鄕黨の團結、國家の向上発展を論じ、最後の一章「國旗の光」に於て日本國民の天職は平和人道の上にあることを闡明せり。

御製　山を拔く人の力も敷島のやまと心ぞ基なるべき

を以て結び、思想の中正穩健なる、讀む者をして、光芒陸離眞に是れ空前の『國民讀本』たるを首肯せしむ。

觀來れば編纂の方法、秩序整然として巧緻を極め、全卷脈絡貫通して一糸亂れず、措辭行文亦適强簡明にして、時に古語雅言を交錯し、一讀再讀三四讀するも、單調無味の感を覺えず。余は著者大隈伯が世界的眼光を以て、常に天下の大勢を達觀し、現代の活氣なき教育界に對し、此一大刺戟劑を投じて、永久に我が國民の羅針盤たらしめ、精神修養の寶典として此書を提供せられたるは、殆ど感謝の辭なきに苦むものなり。希くば我が同胞と共に日夕之を熟讀して、益々我が國光の發揮に努めん哉。

二　一人子の入學

「貴方、早く起きて頂かないと、坊やの學校が遲くなりますから！」

前の晩夜を更した余は、さらぬだに春眠曉を覺えぬ時節とて、うつかり寢過ごして、好い心持になつて居る所を、恁ううるさく呼び起されたので、遽てて飛び起きた。時計を見ると早八時を過ぎてゐる。九時迄に坊を連れて登校しなければならないので、急いで顏を洗ひ、日課として居る冷水摩擦もぬきにして、朝飯の膳に着いた。

坊は大正二年の今日から學校に登るのだと言ふので、元氣のよい顏をして、茶碗に顏を隱さんばかりに、せつせと飯を食つて居る。余は今更に其可愛らしい樣子を見て、言ひ知れぬ感に打たれざるを得なかつた。思へば月日の經つのは早いものでかねゞ虛弱な妻が、醫師からは迚も子は出來ぬと宣言されて居たのが、戰勝記念の申し子とでもいはうか、日露戰役後、九段の招魂社に近い富士見町に住んで居た頃、しかも丙午歲の八月十二日に產れ落ちたのが此子で名は祖父の一字を襲はせ、昇と命名したのである。七年間も出來ないと諦めて居たのが生れたのであるから、妻は勿論のこと、自分の喜びは譬ふるにものなしとでもいはうか、それからといふものは寒いにつけ暑いにつけ、二人が家庭

に於ける思ひは、唯此一人子の上にのみ注がれて、夭折することはなからうか立派な人間になれるだらうかと、朝な夕な、寢ても起きても、心配は一通りでなかつた。それが早八つの春を迎へて、愈々今日から小學校に入るといふのである。

學校へ入れるについても、何の學校が善からうか、彼所の學校は近いけれども何うも評判が善さゝうに無いとか、彼所の學校は遠いけれども、教授訓育の方法が善さ相だとか、一年も前から心配して、愈々二三日すれば入學だと言ふやうになると、何んな服裝をさせて行つたら可からうかと、妻は近所中を尋ね廻つて、宛で一人旅でもさせる樣な騷ぎである。で、自分達の頭が禿げたり、白髮交りになつたりするのも、額に皺の寄るのも打ち忘れて、一向に子の生長を待ち續けて居たのが、今まのあたり修學の第一階梯に足を掛けるやうに成つた。

恁う思ふと親たる余の胸の中には、愛情と歡喜とが漲つて、一種の愉悅の情が、自づと咽迄込み上げて來る樣な感じがする。

「學校へ行つたら、先生の言ふ事を善く聽いて、柔和しくするのですよ。それから朋友と喧嘩をしないやうにするのですよ」

と。妻が言つて聽かせると、坊は飯を食ひながら、

「うむ〳〵」

とやさしく領づく。言つて聽かせる母の言葉にも、「うむ」と領づく子の樣子にも、藹々たる和氣が充ちて居る。

妻が坊の身祝ひにと炊いた赤の御飯を、自分は急いで三杯平らげて了つた時分に、時計は八時四十分を告げた。あたふたと身仕度をして、今年の火事ばやいのに恐れ、金庫の引出しに大切に藏つて置いた、區役所からの入學通知書を出さうと、やをら引出しを明けて探して見ると、奇怪千萬！、確かに藏つて置

いた筈の通知書が見えない。

「おい〳〵お前通知書を何うかしやしないか。」

と妻に訊ねると、

「いゝえ、妾知りませんよ。」

と答へる。

「何うもしないものが失なる筈があるかい。」

と、稍語氣が粗くなる。

「失くなる筈があるかいと仰しやつたつて、妾何うもしたのぢありませんわ。」

と妻もむつとなる。

「だつて可笑しいぢやないか、整然と此處へ藏つて置いたのだもの、屹度お前が出して何處かへ藏ひ忘れたに違ひない。行く先に立つて這んなことに成つて、本統に仕樣がありやしない。一體お前が不注意なんだ。」

「不注意だなんて。妾が片付けたものなら兎も角、貴方が御仕舞ひになつたのぢやありませんか、妾本統にいぢりはしませんのですもの。」

言ひ合つた所で仕方がないから、二人がゝりで一所懸命に探したが何うしても無い。恁うなると人間は淺はかなもので、慥に此處に入れたとは思ひ乍ら、それでもと思つて、箪笥の引出から、本箱の引出、およそ斯樣な書類の這入りさうな疑のある所は、隈なく探して見たが、何うしても分らない。其中に時間が經つて了ふ。

「お父さん學校が遲くなるよう。」

と坊は傍から責め立てる。余は益々頭が熱して來る。小言の百曼陀羅を繰り返して、箪笥の引出や箱や色々な書類や等で、座敷中を散かしたが何うしても見着からぬ。

「通知書は後で己が持つて行くから、お前先きに連れて行つてお出で。」

と妻に言ふと、

「大切な通知書を失す樣なことは、親の恥ですから、持たずには行かれません。」

と承知しない。一寸前の愉悅は忽ち變じて苦痛となつて了つた。恥かしいことであるが吾等はまことに淺間しいもので、平常修養した積りで居ても、いざとなると忽ち覆へされて、怒つたり、周章へたり、頭を惱ましたりする。

まあ仕方がない。理由を學校の先生に話したら、入學に差支あるまいと覺悟をきめて、坊を連れて急ぎ家を出た。子供は何も知らぬので、喜び勇んで先に立つて進む。併し自分は何うも心が浮かない。朝の喜びを呼び起さうと力めても、通知書と同樣、何處かに潛んで了つて出て來ない。不精不性に早稻田小學校の門を這入つて受付の先生に譯を話すと、案ずるより產むが安い。

「えゝ宜しう御座います。土屋さんですか、何卒あちらへ行つてお控へ下さい。」

と言つて、式場の方へ導かれた。何だ馬鹿々々しい。恁んな事なら、あんなに心配するではなかつたにと、今更自分で可笑しくもあり、慚しくも思はれた。

周圍を見ると、坊と同じ位の可憐な小國民が、それ〴〵保護者に連れられて、柔和しく並んで居る。親達の顏には皆自分と同じ樣に、嬉し相な色が輝いて居た。晴々した春の光の中に、赤白の小さなリボンのちら〳〵する女子供の美しいこと！。男の子はもう運動場で活潑に遊んで居るのもある。先の不快が何うやら冷めかけて來ると、今度は妻がさぞ心配して居るだらうと氣が附いた。式の始まる迄三十分程間があるといふ先生の話に安心して、坊を待たせて置いて、急いで家へ歸つた。

「奧樣は、書附がお見つかりになりましたさうで、學校の方へ持つてお出でになりましたが。」

と、下女が言ふ。自分が捷路を通つたので、妻と行違ひになつたのである。そ

れから下女に訊ねた。

「何處に在つたのかい。」

「何でも帳面の中におありになりましたさうで御座います。」

急いで探す拍子に、何うかして帳面の間に挿まつたのであらう、矢張通知書は金庫の引出にあつたのである。それから復た引き返して學校に行つて見ると、妻は坊に附き添つて居た。朝からの心配も是で漸と片着いたが、五六丁の道を何回も往返したので。すつかり汗をかいて了つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

七年間引き延すやうに思つて育てた一人子は、汗をかいた位の心配で無事に入學が濟んだ。が、これから行末何うなるであらう。親の心は自分ばかりでなく、皆同じ大きな希望を以て、我が子の將來に期待して居るのである。

三　孔雀

（新作謠曲）

ワキ　翁（動物園の看守）　ツレ　里人（孔雀明王の化身）
シテ　孔雀（雄）　トモ　孔雀（雌）　地　上野　季　秋

ワキ詞「是は動物園に雇はるゝ、翁にて候。あはれかつちる、もみぢ葉を。上の仰にまかせ、掃き清めて候が。老の身の、力も盡きて。少し睡眠を、催ほして候。此あたりにて暫時が間邯鄲の夢なと、見うずるにて候ヨリワ「嶺の梢も紅葉して〳〵。秋風寒く身にぞしむサシ「是は西の國なる。片田舍に育つ者にて候。詞都の空の、戀しさに。海山遠く、唯一人。東の方へ、旅立ちて候道行ウヤ西の海波路を越えて遙々と。ウ〳〵。都に何時か入相の夕間近く身の上野。ウめぐる車も停まれば。心も空に不忍の。池のほとりを打めぐる。清水堂を過ぎ行けば。秋の名殘を惜みてや三々五々の紅葉狩。彼所此所に群れ集ひ。賑ふ

景色面白や〳〵　詞、急ぎ候程に。是ははや動物園に、着きて候。近頃世に珍らしき、鳥獸。數多養ひ置かれ候由、聞き及び候間。かた〴〵一見せばやと、存候。いかに。誰かある。はて、答のなきは。けしう番人の、居らぬげに候。やあ。日ねもす掃除に、つかれてや。老たる人の、高鼾して。一炊の、榮華を夢みる。いと哀れに、見えて候。ヨワク　サシ上げにや有難き御代なれども。浮世の中に年を經て。同寄るべなぎさの捨小舟。楫をたえたる如くにて。敎なければ彼の岸に。渡るすべさへ白浪の。彼方此方に漂ふ果ては。恒の財も荒磯の。塵だになくて園に飼ふ。ヤア　うしとながめて鶴龜の。永き月日も小鹿なく。あはれ涙のかはくまも。ヤア　なくて此世を送るかな。實にあさましき人の身やウヤ　ツレ詞「我れ、心ならずも。翁の夢を、醒まさじと。そと園の内を、見あらく所に。檻の中なる、孔雀こそ。世に珍らしき靈鳥と、覺え候　ツヨク　セル　抑孔雀の頭には。紅青色の毛冠を頂き。翼麗はしく尾は又一しほ。折々檜扇の如く逆立て開

けば。紺の色なる翹の輪に。光れる環紋瑠璃寶珠と見え。兩側には金色）線毛垂れて。げに孔雀明王の瑞相を現はす。あら有難や此鳥は。明王の使と聞く者を。誰か哀れと思はざる

シテ詞「なふ　我等を哀れと、思召す。御身はまこと、我等を使ふ。明王の化身と、存候。ヨワク　實に我等利生の德を仰がんと。此の世に生れ來りしが。過去の業障つきぬにや今まで斯る累縛の。身となりはつるぞなさけなや。飛舞ふこともかなはぬを。あはれと思したびたまへサシ「我等累縛より遁れなば、シテ「その喜びに御身を乘せてトモ「我が故郷に歸るべし

シテ「昔も今も仁德のトモ「道に優れる道あらじシテ「あはれ翁の夢のまに。シテトモ「我等を助け給へかしツヨク「實に道理さらばとて。力任せに檻の戸をえいやとばかり押し開くトモヨワク「あら有難の大悲慈ぞと。雌雄の孔雀嬉しげに。羽ばたき高く天の原。明王を乘せ奉り。かけ舞ふ姿うつくしやワキ詞「はて今の羽音

は、不審にて候。あゝ、彼方を見れば。ゝゝさしく檻なる、孔雀飛出で。明王を乘せ天に、舞昇るぞかしゝ。セル さては我がうたゝねの。夢の告げに現はれし。慈悲の明王檻の戸を。開きて救ひ給ひしか。げにや孔雀に乘り給ふは。誠に夢中の影向と。微塵も變はらせ給はぬぞや。地「翁いよ〳〵感をなし。ウ〳〵。ヤア世に望みなき身なれども。大悲の姿目のあたり。拜むぞ稀有の果報なる　ロンヤ地

「身は是れ有漏のむくろにてシテ「大慈大悲もわかねども地「聖の道の御光はシテ「月日の如く普くて　地「鳥けだものゝ末までもシテ「かけさせ給ふ嬉しさよ　地下「有難や〳〵。陸にも海にも此惠み。軈て到らぬ隈もなく　ヤチハ萬民謳歌の時ぞかしヤ「翁は孔雀明王と。群衆諸共手を合せ、上同「久かたの彼方を見ればつかの間に。ウ〳〵。靉く雲を押わけて。富士の高根を越え行きし。ヤチ孔雀はまたも立ち歸る。有繋住み馴れし。上野の山の戀しきか。夕映に一しほ紅葉色ませる。ヤチハ錦の梢にやすらひてヤア「金色の光明をかゝやかすワキ詞「なふ〳〵人々。あれ双の孔雀を、御覽せよ。明王に救はれたる。嬉しさにや。羽うちかはしまひ始め候よカヽル「げにや別れ難き緣より。今ぞ去り行く我が身なれば。翁の深き情の形見に。いざさらば聖の御世のトモ「目出たき舞を

シテ「舞ふぞかし上同「君が代を祝ふ八千代の舞の曲。〳〵いざや諸人觀よやみよ。クリ同「夫我が國は神代より。いやつぎ〳〵にあれましゝ。天つ日嗣の民草を。惠む光は宛ながらに。旭に似たれば日の本の。國とは、軈て名づけたり。

シテサシ「然るに明治大正の御代となり。泰西文化の粹を拔き。憲政長へに施さる同されば上下心を一にし。忠實業に服し。勤儉産を治め。信義を守り。常に自彊息まざるべしシテ「我等もかゝる有難き。同御代に生れし甲斐ありて。自由の身となり八千代の舞。後の代までも傳へなん。ウヤ　クセ下　うれしさを。昔は袖につつみけり。今宵は身にも餘りぬるかな。ヤチハげに五日の風も十日の雨も。ヤウ時にしたがふ君が代や。西の國より高麗百濟より。よりくる人も見よ祝ふ也。

ヤチハ春は朝日に匂ふ山櫻。敷島の大和心を顯はせり。ヤ夏面白き荒浪の海は環りて我が國を。ヤチハ堅城鐵壁となすぞかし、秋には澄める月影や。ヤ赤き心を紅葉にそめて。たけき勳を立つ田川。流れによどむうたかたの。命消えても名をとゞむ。富士の高嶺に冴えゞ〳〵し。シテ上かくて何時しか冬の來て。ヤ雪の降りつむ時だにも。ヤア菊の薫のゆかしさは。是れ日の本のためしぞやシテ下かゝる芽出たき御代なれば。天長地久神かけて上同祈る八千代の舞の曲マヒシテノリ「日の本の光は代々を照すなり。上同「上は竹の園生百の司をはじめとしシテ「下は山がつ海人迄も中同あやに畏き御教を。普く仰ぐ尊さよ上キリ同歌ハノマイ打上君が代は千代に八千代に。打返〳〵。さゞれ石のいはほとなりてこけのむすまで。萬民擧りて壽ぎつ。國土安全を希ふ。今ぞ東洋平和に歸して。世界に稜はかゞやけり。されどたゞ。戒めと同胞。傲る平家は久しからぬを。是より後はをしへの儘に。治むる人は慈悲を垂れ。住む民草は恩を知り。聖の道をふみ行かば。これぞ眞の理想國。かくて孔雀は妙なる聲に鳴く〳〵も。舞つゝやがて霞にまぎれて。姿は見えずなりにける。

四　溫交會

後樂園

春闌けて櫻花散りそめし明治四十五年四月十四日は、駘蕩の氣都の空に滿ちて、日本晴れの花見日和、日曜の骨休めは常日頃ひた働きの都人には、さもこそと思はるゝ大人出、朝まだきより電車に乘らんとて、辻待人の黑山なすぞおぞまし。午前九時といふに、我も江戸川終點より、押しあひ壓しあふ群にまぎれ、築地なる本願寺の大遠忌に參詣の爲め、身を電車の吊皮に托して運ばれぬ。はや衆僧の莊嚴なる儀式讀經と、數萬の善男善女が念佛に、滿堂どよめき上を下への雜沓、何事のおはしますかは知らざりけり。我は參拜の後豫てより一場の演說を請はれしまゝ、同寺境内に設けし天幕内青年會の演壇に立ち、それより午後二時あたふたと早稻田大學教職員の溫交會に電車を飛ばしぬ。

溫交會は砲兵工廠構内後樂園に、午後一時より開催の案内なりき。定刻に遲るゝこと二時、工廠前に

下車して門衛に着きたるは、溫交會の受付が、そろ〳〵撤退の準備せる頃なりき。通用門を眞直に半丁ばかり行きて左に折れ、更に右方斜に進めば唐門に出づ。これぞ朱舜水の筆になる「後樂園」と題せる額を掛けたる門にて、欄間は透刻とし鳳凰に牡丹、梅、竹の精巧なるに、極彩色を施せるなりき。

園の由來は德川三代將軍家光公が、その愛子頼房卿の爲に、手づから繪圖せさせ給ひ、山の掟、流のまに〳〵築きたるが、頼房卿早くみまかりしかば、水戸中納言光圀卿(義公)に賜はり卿は舜水に意匠を凝らさせ、我が國第一の庭園と稱へらるゝ迄に大成せるものなりき。園の名は朱舜水が宋の范仲淹が語、

先ニ天下之憂ニ而憂。後ニ天下之樂ニ而樂。

に因みて選びしものなれば、敎育を以て任とせる早稻田大學の同人が會する場所としては、げに此上なくふさはし。

唐門を入りて池の邊に出づ。工場の煙突より降らす煤煙と、萬丈の黃塵とに老樹禿し、山あせ、水濁れども、草も木も目なれぬ珍らかなるもの多かり。漸く奥深う進めば三百有餘の敎職員家族、彼方に一團、此方に一群、各造花の櫻をかざし、模擬店に甘藷辛藷、好き〴〵にあされるが見ゆ。我が足園内の廣庭を履みし頃は大隈伯を先頭にそろ〳〵と、新築食堂の外緣に歩を移しぬ。これなん記念撮影の陣取をなせるなりき。

伯、伯夫人、若夫人、令孫女を前に左右と後とには高田學長を始め、理事、科長、幹事、敎授、講師、その他職員より犬學一門の郎黨兒女に至る、爛漫花の如く快濶鳥の如く居並べり。藤井幹事は撮影後大隈伯の演說ありとの報告をなす。聽て三度種板を換へて撮影を了し、演說餘興場と定めたる席に移る。拍手の中に鹽澤博士の簡單なる挨拶あり、次で伯大隈總長身を起し、早稻田大學の同人が、彼の貴族にして且つ平民主義なる水戸義公の開いた、天下の樂に後れて樂むといふ後樂園に斯の如く多數溫交の爲に會するとは、洵に當を得たることにして、又頗る愉快なりとの長廣舌を振はれたり。それより筑前琵琶、百面相、浪花節、西洋奇術、講談等の餘興は下戸と兒女の耳目を慰め、上戸は三々五々談笑しつゝ飲み且つ食ふ。數ある中には敎育や社會問題につき、眞面目に議論せる輩もありしが我が大問題は遲參の酬として、すしも天麩羅も盡き、しるこには子といふものなく、更科そばは唯一盛を餘すのみなりしこと〻よ。

園中を一巡せばやと同志數人と連れ立つ。偶々途に園の監督者に會したればぶしつけに案内を請うて快諾を得たるは嬉しかりき。大堰川の橋を過ぎ行けば、山高き木の間に朱塗の佛閣あり、標木を視れば清水堂と記せり。見下せば岩ふれ落つる瀧つなみ、昔のまゝに涌きかへれり。山道傳へに歩を運べば得仁堂といへるあり。こゝには義公の崇拜せし伯夷叔齊の木像を安置せし所とかや。堂前の流れに架れる